

特 集

# 龍谷大学社会学部開設 20 周年

社会学部略年譜

社会学部歴代学部長

ごあいさつ 20 周年を迎えて

社会学部 20 周年記念事業内容

社会学部開設 20 周年記念シンポジウム

あとがき

# I. 龍谷大学 瀬田キャンパス



I - 1. 瀬田学舎 2号館

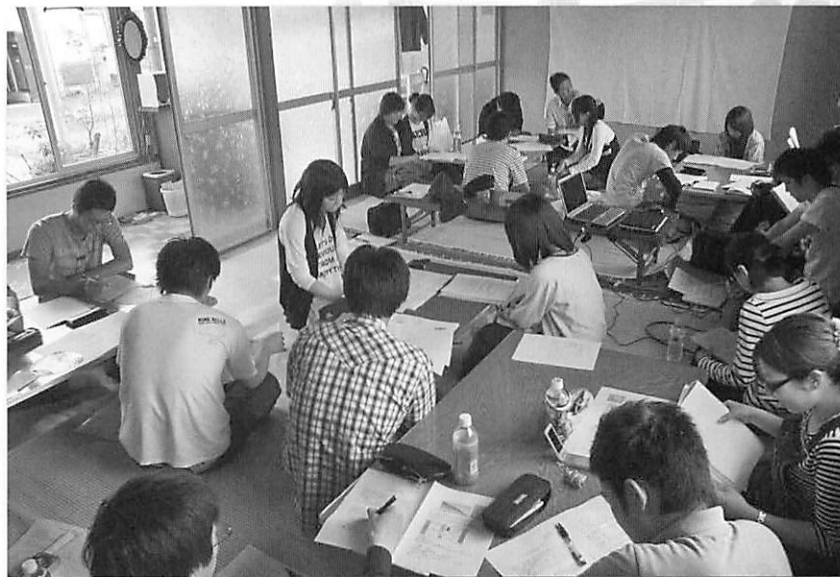


I - 2. 瀬田学舎 6号館 (福祉実習棟)



I - 3. 航空写真による瀬田キャンパスの全景(1999年当時)

## Ⅱ. 社会学部 各学科授業風景



Ⅱ－ 1. 社会学科ゼミ合宿風景（湖西の民宿にて）



Ⅱ－ 2. 地域福祉・臨床福祉両学科共通科目ケアワーク実習授業風景



Ⅱ－3. 地域福祉・臨床福祉両学科社会福祉調査実習授業風景



Ⅱ－4. コミュニティマネジメント学科実習風景（柏原説明会にて）

### Ⅲ. エンパワねっと活動



Ⅲ-1. 町家キャンパス「龍龍」の前で



Ⅲ-2. 町家キャンパスでの講義風景

## 龍谷大学社会学部略年譜

- 明治 12 (1879) 年 大教校時代に社会学は「世態学」として開講された。
- 明治 33 (1900) 年 この年から大正 11 (1922) 年までの仏教大学時代にも社会学講座は開設されていた。
- 大正 11 (1922) 年 龍谷大学が文学部のみの単科大学として発足するとともに、社会学講座が正式に開設される。
- 昭和 17 (1942) 年 文学部哲学科内に社会学講座が設けられる。
- 昭和 43 (1968) 年 文学部哲学科から、社会学・社会福祉学よりなる社会学科が分離独立する。
- 昭和 46 (1971) 年 大学院文学研究科修士課程に社会学・社会福祉学専攻を開設する。
- 昭和 59 (1984) 年 大学院文学研究科修士課程社会学専攻を社会学専攻と社会福祉学専攻の二課程に分離するとともに、社会学専攻・社会福祉学専攻の博士課程を増設する。
- 平成元 (1989) 年 瀬田学舎(滋賀県大津市)に社会学科・社会福祉学科の二学科よりなる社会学部を開設する。
- 平成 3 (1991) 年 大学院社会学研究科社会学専攻・社会福祉学専攻博士(前期・後期)の二課程を開設する。社会人に昼夜開講制を実施する。共同研究機構「龍谷大学福祉フォーラム」が始動する。
- 平成 10 (1998) 年 社会学部の社会福祉学科を改組し、地域福祉学科・臨床福祉学科を開設する。福祉実習棟(6号館)が完成する。
- 平成 12 (2000) 年 社会学科に社会調査士課程を開設する。
- 平成 14 (2002) 年 滋賀医科大学と龍谷大学が医療と福祉を軸に学术交流協定を締結する。滋賀医科大学の医学科・看護学科と本社会学部の地域福祉学科・臨床福祉学科とを中心に、学術・教育・実践の交流を行うことになる。社会学部学会が『社会学部ジャーナル』を創刊する。
- 平成 15 (2003) 年 社会学科がプレイワーカー課程を開設する。
- 平成 16 (2004) 年 社会学部にコミュニティマネジメント学科を開設する。これにより、社会学部は、社会学科・地域福祉学科・臨床福祉学科・コミュニティマネジメント学科の4学科構成となる。
- 平成 19 (2007) 年 本社会学部の「大津エンパワねっと」構想が文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択される。
- 平成 20 (2008) 年 地域連携型教育プロジェクト「大津エンパワねっと」の拠点として、町家キャンパス「龍龍」を開設する。

## 社会学部歴代学部長

第1代	川崎	恵璋	平成元年4月～平成3年3月
第2代	川崎	恵璋	平成3年4月～平成5年3月
第3代	高島	昌二	平成5年4月～平成7年3月
第4代	中垣	昌美	平成7年4月～平成9年3月
第5代	口羽	益生	平成9年4月～平成11年3月
第6代	古賀	和則	平成11年4月～平成13年3月
第7代	古賀	和則	平成13年4月～平成15年3月
第8代	村井	龍治	平成15年4月～平成17年3月
第9代	龜山	佳明	平成17年4月～平成17年12月
第10代	金子	龍太郎	平成18年1月～平成19年3月
第11代	長上	深雪	平成19年4月～平成21年3月
第12代	小椋	博	平成21年4月～平成21年6月
第13代	大友	信勝	平成21年7月～

## ごあいさつ 20周年を迎えて

社会学部長 長上 深雪

1989年に理工学部とともに社会学部が瀬田に開設されてから早20年がたちました。開設当初は、一期生となる一回生だけで、建物も1号館と図書館、体育館があるだけでしたから、今や所狭しとなっているこのキャンパスもたいそう広く感じたものです。OB会でソフトボールをしたり、先生方や事務の方々とテニスを楽しんだりしたのはよい思い出です。開設時には、研究室も講義も1号館をお借りしていましたが、その分、理工学部の教職員や学生と良い意味での交流ができた時代でした。学生は文系と理系という垣根をこえて、サークルや学内での活動を共に築き上げ、10年後には国際文化学部の学生も加えて、より広い視野での活動に育ってきたのではないかと思います。教職員の側も、組合活動や懇親会を合同で開催して交流を深めましたし、第1回の瀬田龍谷祭では模擬店を両学部の教員有志で出しました。当時は、まだ二回生以上が深草と大宮で学んでいましたので、私たちは3キャンパスで講義をしました。社会学科も社会福祉学科も実習教育を大きな柱にしていたので、その準備に駆け回りながら、3つのキャンパスを行ったり来たりしていたことを思い出します。忙しい毎日でしたが、この瀬田キャンパスにどんな絵を描こうかとワクワクしながら、事務の方々と共に希望に燃えて、過ごした日々だったように思います。

それから20年、この間に社会学部は二つの大きな転機を迎えました。一つは1998年に社会福祉学科が二つの福祉系学科に分かれたことです。これにより、従来の社会学科に加え、新たに地域福祉学科と臨床福祉学科が加わり、学生数も開設当時に比べ倍近くに増大しました。二つめの転機は、2004年にコミュニティマネジメント学科を新設したことです。これにより現在の4学科体制となりました。入学定員は1学年500人を超え、龍谷大学の社会科学系学部としては最大の学部となって今日に至っています。教員数も、開設当初は2学科で十数人という体制でしたが、いまや専任教員数は60人近くに達しています。

社会学部における教育を展開する中で、私たちが一貫して大事にしてきたことは、「現場主義」の理念です。四つの学科が協力共同して、この「現場主義」の教育理念を



具体化した教育実践が「大津エンパワねっと」構想（文部科学省 2007 年度現代 GP 採択事業）です。ちょうど 20 周年の節目の年にこの構想が Good Practice として採択されたことは意義深いものだと感じています。これまでは、四つの学科が独自のプログラムを展開し、「共同開講科目」は共通して受講する機会がありましたが、専門教育課程における共同受講はありませんでした。この「大津エンパワねっと」構想にもとづく教育プログラムの開設によって、20 年目にして初めて 4 学科の共同開講による本学部のオリジナルな教育コースが誕生したのです。これは、学生が地域に出向き、住民との協働協力関係を築きながら、地域の問題解決に向けて多様な活動を展開していく内容をもつもので、学部として「現場主義」の理念を深める大きな機会となりました。2009 年度には、龍谷大学認定資格としての「まちづくりコーディネーター」の資格が、この教育課程受講者の第一期生におくられています。学部として量的に拡大してきたと同時に、これまでの「現場主義」にもとづく教育展開が、こうした形で教育の質を深化させ、花開こうとしていることは社会学部の未来を明るくものに導くのではないかと確信しています。

社会学部として初めて卒業生を社会に送り出したのは 1993 年 3 月（1992 年度生）のことです。20 年目の 2009 年には 16 期生が卒業していきました。卒業生の数はおおよそ 5,000 人にも達し、社会で中堅として活躍されている OB も数多くいます。龍谷での学びを礎にそれぞれの場所で一生懸命生きている卒業生は、私どもにとっての大きな宝であり、また誇りでもあります。卒業生が胸をはり、社会学部で学んだことを誇りにして人生が送れるよう、社会学部の教育と研究の内実をさらに深めることが求められています。20 周年は決意を新たに、本学社会学部が未来に向かって大きく羽ばたく節目の年にしたいと思います。これまで社会学部を支えてくださった創設時の諸先輩・諸先生に感謝するとともに、卒業生、在学生諸君にも心より感謝申し上げる次第です。ありがとうございました。

(2009 年 3 月記)

# 龍谷大学社会学部 20 周年記念事業内容 (2008 年度)

## ○瀬田学舎開学 20 周年記念講演会（理工学部と合同開催）

月 日：2008 年 7 月 19 日（土）

講演者：嘉田由紀子氏（滋賀県知事）

演 題：「滋賀県における文理連携の地域貢献を期待して」

会 場：4 号館 209 講義室

## ○龍谷大学社会学部開設 20 周年記念講演会

月 日：2008 年 10 月 25 日（土）

講演者：五木寛之氏

演 題：「うつの力」

会 場：4 号館 209 講義室

## ○龍谷大学社会学部開設 20 周年記念シンポジウム

テーマ：「社会的排除を考える——子ども・若者の場合——」

月 日：2008 年 10 月 26 日（日）

会 場：4 号館 209 講義室

## ○龍谷大学社会学部（社会学科）開設 20 周年記念講演会

月 日：2008 年 11 月 2 日（日）

講演者：大田昌秀氏（元沖縄県知事・前参議院議員）

演 題：「平和と学問」

会 場：龍谷大学大宮学舎清和館 3 階ホール

## ○同窓会

月 日：2008 年 10 月 25 日（土）

会 場：青志館 2F

---

# 社会学部開設 20 周年 記念シンポジウム

---

---

テーマ

「社会的排除を考える」ー子ども・若者の場合ー

日程

2008 年 10 月 26 日 (日)

10:00～11:30 基調講演

13:00～15:00 シンポジウム

会場

4号館 209 講義室

社会学部開設 20 周年記念シンポジウム (2008 年 10 月 26 日)

基調講演

## 希望格差社会を超えて

講師：山田昌弘 氏

古賀：本日はようこそ龍谷大学社会学部開設 20 周年記念事業の本シンポジウムにご来場いただきましてありがとうございます。私は、本日の総合的な進行役をさせていただきます本学社会学部の古賀和則と申します。どうぞよろしく願いいたします。

本日はご案内のように、龍谷大学社会学部開設 20 周年の記念事業といたしまして「社会的排除を考える－子ども・若者の場合－」と題して、シンポジウムを行う予定にしています。まず午前中に山田昌弘先生に「希望格差社会を超えて」と題する基調講演をいただき、さらに午後にはこの基調講演をめぐって、社会学および社会福祉学の専門家の方々を招いて討論会を行います。

初めに主催者を代表いたしまして龍谷大学社会学部長の長上深雪よりごあいさつ申し上げます。

長上：皆さま、おはようございます。龍谷大学社会学部長の長上でございます。本日はようこそお出でいただき、本当にありがとうございます。

社会学部は 1989 年にこの瀬田キャンパスに学部を開設いたしました。第 1 期生わずか 200 名足らずでございました。ちょうど理工学部も 4 学科開設し、当学部の 2 学科合わせて学生数 500 名足らずで出発しました。20 年があつという間に過ぎてしまいました。現在、瀬田キャンパスには 3 学部、理工学部 6 学科、社会学部 4 学科、国際文化学部 1 学科があります。学生数は 8,000 人余りに達しております。

本日の講演会は本学部の 20 周年を記念しまして開催いたしました。社会学部はその名のとおり社会を学問する学部でございますが、どのように

時代に向き合うか、どのような問題を私たちが研究し、また教育をし、世の中に情報として発信していくか、が問われています。改めて本学部が時代と向き合い、社会問題に真摯に向き合っていくことを決意する、その日に本日をしたいと思います。本学部では、共生社会研究センターを立ち上げようと準備をしております。本日をその準備のための第 1 回目の記念講演、シンポジウムと位置づけてまいりました。山田先生をはじめ、午後から宮本先生、山田先生、山縣先生、本学部の教員も含めて「社会的排除」をテーマに、とくに子ども、若者に焦点を当ててシンポジウムを開催していただきます。皆さんと共に、今の世の中にある状況の中で最も問題のしわ寄せをされがちな子どもの問題、若者の問題をともに考えていきたいと思ひます。

きょうを人間で言えば二十歳の門出の日にしたいたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。本日はありがとうございます。

古賀：それでは開演に先立ちまして、先ほども学部長のほうから少しありましたけれども、本日のシンポジウムに至る経緯、今回の趣旨について簡単に紹介させていただきたいと思ひます。

先ほど申しましたように、われわれは、この 20 周年の記念の年にどういう事業を行うかということていろいろ考えてまいりました。その中でわれわれが考えたのは、この機会を 1 回だけのお祭りのな事業ではなくて、これから 10 年後あるいは 20 年後の本学社会学部のあり方を構築するような、その出発点にしようということです。従いまして、事業といたしましては、単年度ではなくて

もっと期間をかけて考えていこう、その始まりのときにしようというふうにしたわけです。

その内容を具体的に申しますと、社会学部には社会学系2学科と福祉学系2学科の4つの学科があります。それら両方の学科が共同して取り組めるようなものであって、さらに内容的には現代社会が抱えている問題を、特に「社会的排除」というような視点——もっと違った言い方をしますと「排除と包摂」というようなテーマ——でもって、新しい社会学部のあり方を考えて作っていきこうじゃないかと考えたわけです。

この「排除と包摂」というテーマは、現代社会にとって大きな問題になっています。社会の場面で、家庭、学校、職場、その他社会のいろんな局面において様々な形において排除されている人々、俗に「難民」と言われることが多いのですが、そういう排除されて難儀をされている人々の問題、それから排除する側、社会の側の仕組みの問題を取り上げて研究していきこうじゃないか。それからもう一つは、研究の結果、排除をどのような形で解消していくのか、それをわれわれは包摂という形でイメージしていますが、そのありよう、あるいは可能性を提案していきこうじゃないか。排除される側の問題、排除する側の問題、それから解決の方法、こうしたところに目を向けて議論を深め、社会に発信していきこうと考えておるわけです。

本日は、そういう流れの中で社会的排除を考え、特に今回は子どもと若者ということテーマとして議論を深めていきこうとしております。そのような経緯で本日があるということをご了解いただけたらと思います。

まず、山田先生には「希望格差社会を超えて」と題してご講演いただきました。先ほど申しましたように午後には社会学、それから社会福祉学の専門家の先生方を交えて議論を深めていきこうとさせていただきます。

それでは長くなりましたが、基調講演に入ります。まず山田先生に基調講演をいただきまして、そして午後のシンポジウムにつないでいきこうと考えています。先生のご紹介につきましては、こちらのほうのパンフレットに書いております。山田

先生は東京大学大学院社会学研究科を修了されまして、そのあと東京学芸大学の教授を経られまして、現在中央大学の教授でいらっしゃいます。ご専門は家族社会学、感情社会学ということでございます。山田先生は「パラサイトシングル」など社会の変化を切り取った言葉を生み出された社会学者でございます。著書に『パラサイトシングルの時代』『パラサイト社会のゆくえ』『希望格差社会』など多数ございます。社会活動の面では内閣府国民生活審議会の委員、内閣府男女共同参画会議基本調査会専門委員などを歴任されております。

それでは山田先生よろしく願いいたします。

山田：おはようございます。日曜日の朝早くから来ていただいてどうもありがとうございます。また、龍谷大学社会学部開設20周年ということで呼びいただきましてありがとうございます。

## 社会学とは何か

私は一応社会学者を名乗ってもう29年くらいになるわけですが、社会学とはあんまり人を助けない学問だなど、最近よく感じるようになりました。なぜかという、私が社会学を学び始めるときに、東大に見田宗介先生のゼミをとったのですが、先生が「社会を、偏見とか常識とかを脇によけて、ありのままに見ることが社会学の本質だ」とおっしゃいました。私は、すべての学問の本質はそうだと思うのです。「社会学というのは、社会を、そのものをありのままに見つめる学問だ」と習ったのです。

社会学がなぜ嫌われるかという、これもまた2000年前のユリウス・カエサル（ジュリアス・シーザー）の名言に、「人は見たいものしか見ない」という言葉があります。2つを組み合わせるとどうなるか。社会学は人が見たいと思わないことを見せてしまう学問になるわけですよ。これでは嫌われちゃうわけですよ。

2000年頃、フリーターなど非正規雇用者のインタビュー調査をしていたときに、こんな経験をしました。地方の30歳ぐらいで大卒の方です。最近プライバシーにうるさいので、あいまいにし

ておきますが、30歳ぐらいの女性が大卒で事務のアルバイトやっています。年収が100万円程度。もちろんパラサイトシングル。親と同居して生活している。「将来の夢は？」とか、「将来どうしたいと思いますか」って言ったら、「私は、とにかく結婚して主婦になって、そして子どもを育てて、育て終わったら社会活動とかして過ごしたいと思います」とか答えるわけですよ。私、ついつい社会学者として次の質問をしてしまったわけです。「もしね、結婚できなかったらどうなさいますか」って聞いちゃったんですよ。そしたら彼女は、口からほとんど泡を吹き出さんばかりに固まってしまったんですね。私は、多分フリーズって状態はこの状態なんだなって分かりましたよ。「ああ、しまった」と思ったわけです。「あっ、もしかしたら婚約者とかいらっしやるんですか」となおも追い討ちをかけてしまいました。彼女はもう何もしゃべれなくなってしまった。「じゃあ、彼氏はいますか」って言ったら「……」ってな感じでした。つまり彼女は結婚できなかったらどうなるか、っていうのを全く考えてないわけですよね。

でも社会学的に言えば、あんまり大きな声では言えないですが、当時はもうちょっと確率はあったかもしれませんが、現在30歳独身女性が将来結婚する確率は多分5割以下です。2人に1人は一生結婚できないっていうような計算……しょうがないですよ、これ計算ですからね。できるかもしれない。でも、できない場合のことは全く考えてないっていうことを明らかにして見せてしまうと、やっぱり人は怒ったり、びっくりしちゃうりするわけですね。だから、それでやっぱり嫌われますよね。だから、きょうの話もあんまり明るい話じゃないですよね。「社会的排除」というタイトル自体からして、あんまり明るい話じゃないです。

私は、この3月まで東京学芸大にいたんですが、ゼミの学生にお別れ会を開いていただいて「先生、本当は言っちゃいけないかと思うんですけど」って男子学生が言って、「山田先生のゼミが終わる度に、暗い気持ちになって家路につきました」って言うわけですよ。まあ、いい、良かつ

たと思ったんですね。卒業生と会ったときに、卒業生が言うには「山田先生が言っているほどはひどくはなかった」。まあ、多少は脅しといたほうがいいかなって思いましたけども。

社会学の基本の授業になりますが、講義の最初に1年生に対して私は「これからはリスク社会になるよ」という話をするわけですね。どういうことかっていうと、今ここに100人の学生がいるとする。国立社会保障人口研究所の推計によると、このうち25人、4分の1は一生結婚できません。結婚する75人のうち3分の1の25人は一度は離婚しますよ。何度もする人もいますけれどもね。つまり今の若い人で、結婚して離婚しない人は2人に1人しかいないわけですよ。今の70歳ぐらいの人だと、だいたい97パーセントの人が結婚して、離婚した人がだいたい1割ぐらいですから、9割ぐらいの人は結婚して離婚しないで一生を送ってきたと思うんです。今はもう20歳ぐらいの人で、結婚して離婚しない人は2人に1人という予測なんですね。予測ですから将来どう変わるか分かりませんが、だいたいそんなところだと私は思っています。自分じゃないとよく思うんでしょうけれども、だいたいならしてみればそうだと思うわけですね。

だけど、ここ10年の間に、大学の先生をやっているけど、やっぱり思いがけないことがどんどん起こってくるわけです。私のゼミ生でも3年生のときに結婚して4年生のときに離婚した人がいますし、できちゃった結婚で子持ちのゼミ生もいます。いや、単に私のところに学芸大の中でもそういう人が集まってくるんだと思いますよ。

それで、子持ちで教育実習に行ったら怒られて帰ってきた。それもひどい話ですよ。なんか教育実習は、学生が朝から晩まで、夜中まで翌日まで実習枠を作っているのが当然のように考えられていましたけれども、子持ちですからね。だから、小学校の先生に嫌味を言われたっていうんですよ。「子どもの保育園があるから帰ります」って言うのと「ほかの教育実習生は残っているのに、あんただけ特別扱いはできないんだけどな」みたいな言い方をされるんです。でも、そういう社会ができちゃったわけですから、それはやっぱり少な

くとも先生たる以上、表だって排除はできませんから、嫌味を言われる程度ですんだわけです。というわけで、社会学は、そういうありのままを見せるんです。

### 再帰性とは

最近、社会学では再帰性という概念が重要になっています。つまり、言ったことが自分に帰ってきてしまう社会だっていうことなんです。そうなってくると、実は大学の先生もそのんきに研究だけをしていればいいとか、調査してあればいいというわけでない。なぜかという、去年の日本社会学会で格差のシンポジウムがあったんです。そのとき、東大教授に佐藤俊樹さんという名の通った研究者がいますが、彼が言ったのは、「昔の研究者は中立的な立場でいられた。昔は階級というのがいろいろあった。一方で会社の経営者とか資本家がいる、他方で労働者がいる。研究者はどちらの立場にも立たない中立的な人っていう立場でいられた。だけども今は違う」と。今は社会的排除は大学の教員間でもあるわけですよ。つまり正規教員と非正規教員という間で、明確に社会的排除っていうのができているというわけです。大学の教員だって、実は社会的排除の当事者なんですよね。これは、言ってしまうとなかなか厳しい話になるわけですよ。

だから私、「せめて」と思うんです。私の前任の大学は国立大学だったから予算がどんどん減らされるわけですよ。まず、何をカットすると思います？ 非常勤講師の人件費をカットする。常勤の先生の給料を下げるのは難しいから非常勤の人件費を下げる。だから、執行部等に文句を言ったわけですよ。「それは、やっぱりないんじゃないの？ 非常勤講師（非正規雇用）と正規雇用の間の格差が広がっているっていうんだったら、せめて、大学の先生の間でも、やっぱり非正規雇用の人の賃金を上げて、正規雇用の賃金を下げるようにしたらいいんじゃないですか」と言った。そしたら、これもまた嫌味を言われてちゃって、「山田先生はいいよ、アルバイトで稼げるから」みたいに言われてしまうと、何も言えなくなるのですよ。

あと、定年延長の問題が起きたときも、私は一応反対したんですよ。「実際、定年延長すると若い先生が入れなくなる、排除されるのは良くないんじゃないか」と言っただけで、定年延期に反対したら、その声はかき消されたんですね。やっぱり大学の正規の教員は既得権がありますから、ほとんど賛成で結局通ってしまった。辞めたわけじゃないんですけど、もっと定年の長い大学に移ってしまっただけ。「山田先生、自分の言葉に責任もって早く辞めましょうね」とみたいにアルバイトの秘書の人からはついつい嫌みを言われました。というように、ありのままに見るときってというのはやっぱり厳しいですよ。自分にも返ってくるので厳しいんです。

### 社会的排除について

社会的排除っていうと exclusion の訳なんですけど、確かに exclusion を「排除」と訳してしまったということの問題があります。先ほど「難民」とおっしゃったんですが、なんかホームレスとか、そういう難民が現れて、そういう人がかわいそうだから助けましょう、みたいな話に聞こえてしまうんです。多分、午後は宮本先生がいらっしゃるので、そういう話は詳しくなされると思うんです。排除よりも「分断」と訳した方が良かったかなと思います。なぜかという、大学が非正規の教員に、別にアンタはいなくてもいいって形で排除しているわけじゃないですね。難民っていうと、いなくてもいいってふうについつい思ってしまうがちですよ。そうじゃないんですよ。社会的に必要なわけですよ。非正規の人も後で言いますが、アルバイトの人も、フリーターの人も社会にとって必要な人なわけですよ。必要な人だけども、分断が起こって一人前の人とはなかなか見なされない。

だから正式に、exclusion を、何か居ても居なくてもいい、かわいそうな人たちと考えてはいけません。社会的に必要なんだ。日常的に社会的にちゃんと役割を担っている。社会学的に言えば、社会にとって必要な構成員であるのにもかかわらず、一人前とは見なされていないような立場の人が増えてきている。これが社会的排除の

本質だと思います。それが、あらゆるところで起こっています。だから、われわれ大学の教員間では、正規の教員と、非正規の非常勤だけしかしていない先生という形で分断が起こっている。学生の皆さんだったらアルバイトしていると思いますが、アルバイト先の正社員と、ただのアルバイトという形でも起こっている。だから、正確には排除っていうよりも分断と言った方がいいと思います。もし排除と言葉を使うのだったら、何から排除されているかということをはっきりと示さなければいけない。私は「希望の社会学」を提唱していますので、最近「希望から排除されている人々」だと言って言うようにしています。

### 希望格差について

レジュメが配られていると思いますが、「希望は努力が報われると感じる時に生じる。努力してもしなくても同じだと思えば絶望が生じる」。つまり、私が「希望格差社会」と書いたときは、努力が報われてどんどん社会的に一人前として認められる人と、希望から排除されていくら努力してもなかなか認められない人々に分断されている社会のことを言っています。別に努力していないわけではない。必死で一緒に働いているんです。大学の先生と非常勤の先生と一緒に働いているわけですよ。だから、ホームレスとか難民のように、目に見えて分断されているわけじゃない。一緒にいる。アルバイトだってそうですよね。正規の社員、アルバイトの社員だって別に目に見える形で分かれているわけじゃない。一緒に働いている。一緒に働いているんだけど、一方には希望があって一方には希望がなくなっている。われわれは、そういう社会になりつつある中で、どうしたらいいかっていうのを、実は考えなくてはいけないということです。

皆さんは社会福祉学科ということなんですが、福祉の現場に行くと、どっちが排除されているんだろうな、とかいう感覚に襲われることもあったんです。介護保険などでヘルパーさんが行きますけど、果たして、厚生年金等をもって介護を受けている人はかわいそうな福祉の対象で、介護を実際に行う人は援助する人だと言えるかどうか

ですね。

これもあんまり大きな声じゃ言えませんが、介護福祉現場だと正規職員であっても平均給与は300万とかですよ。非正規の訪問介護だと、本当にフルタイムで働いても平均給与が百何十万かという調査もあります。でも受け取っている年金が200万、300万の人が多いわけじゃないですか。そりゃまあ、ガンガン働いてきた成果っていうのもありますけれども、働いて支援しているほうの生活が苦しいわけです。もちろん、そうじゃない人もいますよ。介護されている人でも年金収入の低い人もいます。そういう人もいれば、介護を受けている人のほうが、収入が高くてずっといい生活をしているんだっていうようなこともあります。実際どっちが社会的な排除をされているのかな、なんていうふうに思ってしまうわけです。きょうもこれじゃ、だんだん暗くなってきますよね。すいませんね。私は最初から暗い話しかできないというんです。

だから、そういう状況を変えなきゃいけないですが、なかなか難しいと思いますよね、っていうお話なんです。本題に入らせていただきます。先ほども言いましたが、希望は努力が報われるときに生じる。自分がやっている仕事でもいいですし、家事でもいいですし、勉強でもいい、そういうものが将来、報われるんだって思えば、人間は生き生きと希望を持って生きられる。逆に自分が今やっている努力、仕事でも、勉強でも、主婦になってもいいですけど、それが報われない。やってもやらなくても同じだと思えば、人間は絶望に陥るわけです。

だから、社会全体を見回してみても、全ての人が希望を持てる社会、希望をもって生活している社会というのが、私の基準で言えば、いい社会。逆に希望が持てない人、つまり努力したって無駄とか、しょうがないっていう人がどんどん増えてくると、安心や活力が社会全体から失なわれてくるわけです。これはもちろん二つのタイプがあります。

一つは既得権っていうのがあります。私から言わせれば、努力しなくても報われることを私は既得権だと思います。自分で努力しなくても既得権



があるから、収入だけじゃなく、いろんな意味で報われる。そうすると、社会はどんどん低下していくんです。既得権がある人は努力しないし、既得権がない人は既得権がある人を見ると「やってしょうがないな」と思う。そうなるとだんだん社会は低下していく。

ここ10年の改革は、公務員改革から始まって——小泉内閣時代から始まるわけですけども、根っこは構造改革にあります——公務員パッシングも含めまして、道路公団改革、最後に小泉さんがやった郵政民営化に至る一連の流れの中に、「どうも既得権に守られている人がいる。努力しなくても、のんびりしていても、一生楽に生活ができる人がいるらしい。だからそれを壊すべきだ」というような意見が、数年前までは主流を占めていたわけです。私から言ったら、以前の日本社会は一種のparasite社会ですよ。地方の土建業みたいに、とにかく公共事業で談合すれば自動的に仕事はできて、多少は努力しているんでしょうが、努力しなくてもお金が儲かるみたいなものがあった。それをなくしていくのは、ここ10年の一つの傾向になると思います。

### 1998年という分岐点

しかし、その一方で、努力しても報われない人は、逆にこの10年の間で増えてしまった。努力しても報われないって思っている人がたくさん出てくると、つまり将来に絶望している人がたくさん出てくると、社会は暗くなってきます。かつ、多分ここ10年の間にそれが増えてきた。私が最初に『希望格差社会』を書くきっかけになったのは自殺者統計です。1997年から1998年、この1年間で自殺者数が約8,000人増えているわけです。97年は多少増えたんです。2万4,000人ぐらいだったのが、1998年に突如、3万2,000人。ちょうど中高年男性自殺者が8,000人増えている。厳密には8,000人じゃないですが、中高年男性自殺者が1年の間に倍とはいかないまでも、その層の自殺者が増えている。まさに、1998年に人々の絶望が増えるような出来事が起こった。

私のように大学の先生とかをしているとあまり気付かないんですよ。かつ公務員の人も気付かなか

かったそうです。でも民間の人に聞いてみると、97～98年は普通のサラリーマン、会社員のマインドを徹底的に変えてしまった時期だったらいいですね。何が起こったか。拓銀がつぶれ、山一証券がつぶれた。つまり名だたる一流企業という銀行、証券会社などがつぶれてしまった。北海道のサラリーマンの人に聞くと、この当時、拓銀がつぶれたのはすごいショックだったと言うんですね。大学の先生をやっていると、学校の先生って別に不況だったからって今のところは給料が下がるわけでもない。私も私立になったので分かりませんが。

大学の先生とか公務員の人は気付かなかった。民間の会社に勤めている人のマインドは、その97～98年の間に一斉に変わってしまった。逆に97年ぐらいまでは、普通にしている普通に努力をしていれば、普通に勤められ続けて無事に定年を迎えて、年金をもらえて一生食えるからという気分でもうもいたらしいけれども、98年になると、現実にリストラ等にあった人は、部分的には少なかったかもしれないけれども、社会意識的にはすごく大きな変化があったんです。社会意識的に言えば、もしかしたら、このまま定年まで勤められるかどうか分からないというような意識変化とか、もうつぶれる可能性だってあるし、失業する可能性だってあるっていうように意識がひっくり返ってしまったんですね。

統計関連を見てみると、1997～1998年を境にして、まず一つは、特に福祉の分野で児童虐待が急増するわけです。今、私は総務省の統計研修の客員研究員をやっていて、子育て家庭の年収をずっと調べていたんです。やはり1994年と2004年を比較すると、子どもを育てている家庭で低収入の家庭がどんどん増えています。子ども1人だと、収入が高い家庭が増えているんですよ。でも、子どもを2人3人持つ家庭だと低収入、年収200万とか300万で子どもを育てた世帯が、10年前に比べてだいたい1.5倍ぐらいに増えています。

そうすると児童虐待も増えますよね。増えますよねって言うか、児童虐待の三大原因と言われてるのが、不安定就業と一人親と低収入。その三

つ、その組み合わせが児童虐待を生みやすい要因になっています。私も東京都の児童福祉審議委員会で虐待児童の家庭の収入調査をやっていたんです。だいたい親の生活自体が将来成り立たないというときに、ちゃんとした子育てしようたつてなかなか無理なところもあるわけです。

一方で、収入が高い、子ども1人の家庭が増えているんですよ。高収入の共働き。すごく高いかもしれません。夫婦2人で正規の教師やっていたりとか、われわれ教師もそうです。あるいは医者同士で結婚しているとか、そういう中で、子どもを育てる家庭も、また共働きから出てきちゃったんですよ。一方で高収入共働き家庭もできて、一方で低収入で子育てをする家庭ができています。

で、これもまた自分たちに返ってくる問題なんですね。あんまり大きな声では言えませんが、自分のことになると大学の先生も、自分の子どもを私立学校に入れようとするんですよ。ある左翼系の教育学者ですごく有名な人なんです。「貧困はけしからん、文部科学省はもっとしっかりしろ」とか言うような先生がいるんですよ。その先生の子どもは、ある有名私立へ通っているんです。だから、そうやって言う先生も、自分のことになると分からない。昔はそれで良かったんですよ。昔は大学の先生は中立的な立場でいくのだ、っていうのでしたから。

一方で私の知り合いに、旦那さんも非常勤講師をずっと何十年も続けて、奥さんも非常勤講師を何十年も続けて、そういう中で子どもを育て上げた人もいます。この社会にとっては、そこもまた難しいとこなんですよ。

『希望格差社会』についても宮台真司先生にちょっと批判されちゃったんです。「いや、希望がなくなつて楽しく生きている方が幸せだっていう可能性については、山田昌弘は言及しない」とか言うわけですよ。まあ、そうですよね。しいて今のところと言いますが……本当は、これからは何が幸せなのかっていうところに、だんだんと幸せとは何かっていうところに、実は社会的な関心を移行させなくてはならないような時代にきているとは、私は思っています。

「非正規で自分のやっている仕事に希望がない、低収入だからといって、それがいけないことだと断定するのはいかがか」と、宮台真司先生は反論するわけです。まだまだ山田昌弘はそういうふうな古いタイプの主張だ、と批判されるんですけど、そういうことも考えなくてはいけないですが、でも現実に社会的な排除をされて希望がなくなっている人がたくさん出てきているわけですから、そこは特にここ10年の間に出てきているという事実はなんとかしなくてはいけない。それをどういう方向にするかというのは、これから議論していかなくてはいけないことです。そういう意味で私は宮台真司さんと同じように、低収入の人を社会からなくすことはできるのだろうか、全ての人が安定した収入を持って生活できるような社会、安定した、しかも結婚して豊かな生活を送れるような社会は、今後くるかどうかっていうのは、これは難しいことだと思っています。

## オールド・エコノミーとニュー・エコノミー

もう半分ぐらいの時間になりましたね。レジュメ1ページの「経済の構造変動と経済格差の拡大」っていうところに戻りたいと思います。かつて、だいたいワーキングプアと言われている人たちが、社会的排除をされている人たち、正確には分断された人たちとイコールだと思います。プアじゃなくてもいいですけどね。いわゆる私が言うパラサイトシングル、親と同居して低収入な人も、親と同居している限りプアじゃないですよ。若いけど親はしっかりしてプアではないですが、仕事から言うと低賃金の仕事をしている。将来の仕事でなかなか評価されることがない人たち。もしくは実際にいくら働いても人並みの生活に達しないワーキングプアの人たち。ここが議論のしどころなんです。

今まで日本もそうですし、世界もそうでした。1997年までの社会は、朝から晩まで働いて人並みの生活水準に達しない人は存在しない、ということ的前提にして組み立てられていたし、今もそうです。そして、1997年までの日本社会は、朝から晩まで働けば人並みの収入が得られて当然だ、っていう前提のもとに社会が組み立てられて

います。だから、ワーキングプアは存在してはいけないんですよ。いけないって言うか、存在するはずがないものとして社会の中で見続けられてきた。もし朝から晩まで働いて生活できないような収入しかもらえない人がいたら、好きでやっているだけだ。今までは社会はそういう扱いをしてきたわけです。現実にはだいたいそういう状況はあったわけですね。

男女の問題があるから難しいですが、男性だったら1997年ぐらいまでは、朝から晩まで働いていけば、妻子を養うぐらいの収入は得られる職につけていたんですね。だから、今までワーキングプア、低賃金なんてものは問題にならなかった。例えば、これも福祉年金の話ですが、私の卒業生で専業主婦をやっている人がいるんですね。実際それは珍しくも何ともないわけです。最近、専業主婦志向が若い人の間で増えているんですよ。まさか山田ゼミにはないだろうと思ったら、去年ゼミの3年生に「将来、何になりたい？」って聞いていったら、ある女子学生が「私、専業主婦になりたい」って答えてくれて、ビックリしちゃったんですよ。だいたい学芸大は職業志向が高い女性が来るところだと思っていましたし、ましてや山田ゼミですよ。私のゼミですよ。私のゼミを選んで専業主婦になりたいって言う、よく勇気があるなと思って、「私の授業、出なかったのかな？」って聞いたわけですよ。「山田先生の授業は全部出て、全部Aをもらった」って言うんですよ。「え？でも授業で言ったろう。自分の収入で妻子を養って家を建てて、車を買って、子どもを大学まで行かせられるような収入をもつ男性は、1970年～1980年には2人に1人だ。職業社会学でいろいろ計算すると、今の若者の男性で妻子を養って、つまり共働きせずに家を買って、車を持って、子どもを大学に通わせることができる可能性は10人に1人いるかいないかだぞ。10パーセントぐらいだぞって最初に言ったろう？」って言ったんですよ。そしたらその女子学生、何と答えたと思います？「ええ。私もそう思います」ってね。「私はその10人に1人の男性を捕まえる自信があります」。まあ、そういう生き方も、多様な生き方ですから、いいんですけど、自信があ

るわけです。

確かに、やはり離婚が増えているって言うても、離婚は、これはアメリカの研究でもそうなんですけど、収入が高い層と低い層に多いんですよ。中流層って離婚が少なく、収入が高い層と低い層で、離婚が増えたわけです。なぜかと言うと、だいたい2タイプ。収入が低い層は、夫が居ても居なくても同じようなわけですね。居ても居なくても同じだったら居ない方が、まあ、良い。失業したり、リストラされたり、倒産した人たちに離婚のケースが日本でも多いわけですが、そんな夫はいない方がいいわけですよ。夫がいると母子手当や生活保護を受けられない。低収入の夫が居るよりも母子家庭になった方が、生活保護を受けやすいですから、よっぽどいい生活ができる。低収入層で離婚が増えた。だから、日本はここ10年の間に、低収入、無収入の既婚男性が増えているので、離婚が増えているわけです。

他方で、高収入の層は、アメリカもそうですけども、男性が高収入だとたんまり慰謝料や養育費をもらえるわけです。だから、離婚する際も、高収入である夫と離婚する場合と、低収入の夫と離婚する場合とでは、その後の生活に雲泥の差が出てくるわけですよ。10人に1人を捕まえるのにも、現実にはそういうケースがあるから困るんですよ。本当にあるんですよ。私の知り合いの女性で、お金持ちの男性と結婚して数年で離婚したんです。旦那の浮気が発覚して離婚とかいうのがあるんですけど、どうなったかという都心にメゾネットタイプの高級マンションを慰謝料としてふんだくって、あとは楽しく暮らしているんですよ。ある高収入専業主婦からは「私はいい旦那を捕まえるために努力した。だから報われていいんだ」って。努力は報われる。いろんな努力があるんだなと思いました。

そういう例があると、私もそういう例になれるんじゃないかなと思って、多くの人は失敗しちゃうんですよ。自分の中で自分の人生をギャンブル化するのはよしましょう、と私は常に言っているんです。

やっぱり、ここ10年の間に日本社会では資本主義のあり方、社会のあり方が大きく変わってし

まったのが、最大の原因だと思っています。多分、こういうふうになったのは、雇用制度を変えたのがけしからんとか、大企業がコストカットのために社員を絞って非正規を増やしたのがけしからんとか、確かにけしからんことではあるんです。介護保険で介護を民間化、民間で市場でやるのはけしからんというのは、けしからんのですが、そのけしからんのも、ある程度けしからんことをしなくてはいけなくなった理由があるわけですよ。

大企業がけしからんというのもあるんですが、中小企業になると、今、製造業の下請けの現場で何やっていると思いますか。多くの人が検品をやっているんですよ。ある三次下請の中小企業で従業員が6人。6人中3人は検品をやっているわけです。でね、物は中小企業の工場で機械が作るわけです。機械が作った部品がちゃんとした精度で、ちゃんと動くかどうか。機械だって間違いを起こすので、それを人間の手でチェックしなければならない。その機械をテスターにかけて、不良品はよける作業を朝から晩までしているわけです。これを正社員にやらせたら、そりゃもう今のコスト競争には勝てませんよね。

## 労働の変化

昨日泊まったホテルに付いているテレビが液晶テレビだったんですが、テレビの上に「世界の亀山工場」って書いてあるわけですよ。多分そのホテルは、宣伝するから安く入れたんだと思います。まあ、そりゃいいですけども。あそこの最終工程、何やっていると思います？ 液晶パネルは確かに機械が全部オートメーションで作るんですよ。最後の工程で何をやるかっていったら、液晶パネルに傷が付いているかないかというのを人間の目で確かめて、傷が付いているやつをよけるのをやっています。

つまり、ここ10年の間で起きたIT化とか、オートメーション化は何を意味するか。人間は機械やパソコンにできない仕事をしなきゃいけないということが、ここ10年の間に日本で——世界は20年ですけども——日本社会で起きてきています。機械ができない仕事って何か。機械がで

きない仕事は2種類あって、一方で機械を作ったり、システムを設計したり、新しいアイデアを出したりする知的な仕事は、機械にできない仕事として必要だ。しかし、一方で、あまりにも単純すぎて機械にできない仕事として、検品、清掃、数字の打ち込み、人間の書いた数字をパソコンに打ち込む仕事がある。計算のような仕事は機械がやってくれますが、計算をするまでデータを打ち込む仕事は機械がやってくれない、だから人間が打ち込む。

日本経理協会（経理の団体）で講演したときに、「ここ10年で起こったことは、まさに山田先生が言ったことと一緒です」と言われました。昔はもちろん、正社員で専門的に「こういうふうに関理するんだよ」って、会社ごとに経理の職を育てていたわけですよ。でも今は違う。昔10人の正社員でやっていたのが、経理ソフトの導入によって、5人の正社員と5人の派遣社員でよくなった。経理ソフトがあるおかげで、伝票を経理ソフトに打ち込めば自動的に計算や分類をしてくれる。だからそれを指示したり、派遣社員を監督する5人の正社員と5人の派遣社員で朝から晩までデータを打ち込んでいる。昇進がない派遣社員で十分です。

販売現場もそうですよね。学生の皆さんはコンビニエンスストアとか、ファストフード等でアルバイトをしている人もいますが、昔の商店とファストフードやコンビニ、スーパーの違いは何かと言ったら、一番大きいのは企業のPOSシステムです。レジ打ちの代わりにピピピピと商品の売れゆきを自動的に計算する。あれは何をやっているか。アルバイトした人は分かっていると思いますが、どの年代のどの性別の人が、だいたい20代女性が、何を買ったかをレジに打ち込む。コンビニやスーパーでバイトした人がいたら、そういう経験があると思います。何十代のどういう人で、どういう地域に住んでいる人は、どういうものを買っているかっていうのは一目瞭然で、中央に集計されるわけですよ。つまりどういうのは売れ筋の商品であるかっていうのは現場の人は全く知らなくていい。中央でPOSシステムで入ってくるデータを監視している人が知るわけですね。それ

で、どういう商品が売れ筋かっていうのを、トラックで店に送りつければ、これでいいわけです。

昔、そういうのがなかった時代は、その店に勤めている人が、どういうのが売れてどういうのが売れないかというのを、自分の目でいちいち確かめて、こういうのを仕入れよう、ああいうのを仕入れようっていう形でキャリアアップしていったんですよ。しかし今は現場の人は全くキャリアアップする必要がない。中枢の人だけちゃんと監視している。これがいわゆる大規模チェーン店POSシステムがもたらした雇用革命ですね。昔は10人の正社員が必要だったところが、まさに5人の中枢の人と、5人の現場の人に分かれてくる。

中枢の人は大変ですよ。ある食品メーカーは、コンビニ向けに年間300種類の新製品を納入するんですよ。いろんなのがあるでしょう？ 昨日も私は、つまみをホテルで買いました。普段はコンビニで買いませんが、いろいろありますからね。誰が何考えているか分かんないですから。ポテトチップだって唐辛子たくさん入っているポテトチップがあると思えば、チョコレートでコーティングされたポテトチップがある。と思えば、ホワイトチョコレートでコーティング……昨日は塩キャラメルキャンデーだったかな、何だそれとか思うようなものがどんどん……それだけ考えている人がいるわけですよ。一方で、そういう新製品をそんなアイデアでもって考えてドンドン出さなきゃ飽きられちゃう、という人がいて、そういう人には高収入を払わなきゃいけない。となると、現場で売っている人は、使い捨てとして低収入の人を雇わざるを得ないというような状況になってきますよね。

そういう形で、まず一つはオートメーション化、IT化において、高度な知識を要する専門的な仕事の方が増えて、昇進の必要なく、言ってみれば、機械やシステムに使われる人が他方でたくさん出てきてしまった。これが社会的分断を、排除を生む根本的な原因になっています。

あともう一つ、機械に代替できないものとして、これも悲しい話なんですけど、比較的単純な仕事に、家事代替の仕事がありますね。保育、介護といった問題です。それが少なくとも日本とアメ

リカとでは低収入に抑えられる。なぜ抑えられるか。これは今年の福祉社会学会のテーマだったんです。私は研究活動委員会で、介護者の状況とかを扱ったんですが、介護職の専門職化を推進しなきゃって言う人がいたんです。看護師とか医者というような専門的な、確立して収入が高い職がある。確かにあるわけです。しかし介護の現場の人は低賃金。だから、介護を専門的な知識をつけて、そういう看護師のような職に近づけて収入を上げさせようと言うんです。

これもまた同じことで私は無理だと思います。なぜかって言えば、看護師とか医師はなぜ収入が高いのか。いざというときの人だからですよ。専門的に自分にはできない。つまり病気を治して回復させるのです。それを使う者から言えば、いざというときの出費なわけですよ。つまりいくらお金を払っても、とにかく病気は治してもらいたいと思う気持ちが、医者や看護師の収入を高くしているわけです。問題は、介護や保育のような仕事は、いざというときにどうしようもなくなって駆け込むものじゃないですよ。自分でやろうと思えばできてしまう仕事なんですよ。つまり日常的な介護の代替をするような仕事は、その仕事をする機会費用に収斂します。つまり介護や保育の費用が、どんどん高くなってしまったら、家事として家族が行った方がいいという機会費用にまで、収斂してしまう。

でも、アメリカではそういうことが実際に起こっていますね。アメリカの事情だと保育業はほぼ最低の賃金、つまり高校生のバイトが主なんですよ。なぜかという、アメリカは保育が市場化されていますから、こういうことやれるわけです。年収200万の人が、年収100万のベビーシッターを呼べるわけですね。浮いた差額の100万円分があるから、ベビーシッターを雇うわけです。自分がやった方が得をするんだったら、つまり年収100万の人が年収200万円のベビーシッターを雇うわけがない。そりゃそうです。日常的な家事代替業務、つまり家族がやってもできるような仕事は、賃金は高くないんですよ。そういう場合は北ヨーロッパみたいに、国が公務員として雇って、もしくは日本の介護保険ができる前のよう

に、国が介護士を直接公務員として雇用してやるシステム以外は、賃金は高くならないシステムになっているわけです。看護師や医師を家族がやることはできませんから、そんなことはできないとわれわれ思っていますから、看護師や医師は給料を高く設定できるわけですね。中国のように低く設定した国もありますが、自由主義のもとでは高く設定がされています。家族の代わりにやるような仕事は、なかなか収入は上がらないシステムができていて、という経済構造になっちゃっていますので、なかなか上がらない。というようなことになって、いわゆるワーキングプアとか低収入の人はどんどん増加しているような時代になってきているわけです。

### 被害者としての若者

そこで、日本でその被害を一番受けているのが、まさに若者層です。たまたま、さきおとといまでスペインに行っていました。スペインも去年あたりから介護保険が導入されたので、それに絡めて少子高齢化にどう対応するか、というシンポジウムが開かれています。スペインでもここ10年の間に外国人労働者が急激に増えたんですよ。やはりスペインも10年ぐらい前、ユーロ圏に入る前は、日本と同じように外国人労働者はほとんど入ってこなかったんですが、ここ10年の間に外国人労働者が7~8パーセントの割合で入ってきている。日本はわずかに数パーセントです。やはり経済活動が活発になって低賃金、低収入の職ができると、それを担わせるためにスペインも外国人労働者を、モロッコとか、そういうアフリカの人が多みたいですけど、そういう人をどんどん受け入れて、介護を含めた低賃金の仕事を外国人労働者に担わせてきたんですね。今はこのサブプライムの不況で、とうとうスペインも「外国人労働者は海外に帰ってくれ」というような人が増えているという政策に転換しちゃったと、つい最近、新聞報道でありました。そういうふうになりました。

いい悪いは別にしろ、日本はそういう外国人労働者を入れなかったんで、経済の構造転換、新しい経済への転換によって必要になった非正規、デ

ータの打ち込みとか、清掃とか、検品とか、介護とか、そういう労働を若者たちに全部押しつけてしまった。これは午後からの宮本さんの最大のテーマですが、若者たちに全部つけを負わせてしまったのがワーキングプア出現の理由です。

2年ぐらい前にフランスの経営者、経営大学院の人とこの状況について意見交換したんですよ。日本の低賃金の若者のフリーターの数は二百何十万人で、年収150万以下の若者の割合が増えている。「え？年収150万？じゃあ暮らせないだろう？そういう人たちが何百万人もいる？」で、そのフランス経営大学院の人に聞かれたんですね。「どうして日本の若者はデモや暴動を起こさないのだ？」年収が150万から200万。外国人労働者も入れなくて、そういう職に就いている人……おかしいな。何百万人もいる。よくそれで日本の社会、若者は反乱を起こさないなって言われたわけです。だから私は「日本ではパラサイトシングルと言いまして、親が生活を支えているから親と同居していれば、年収150万でもおたくの国に行ってエルメスとか買って帰れるんですよ」って言った。「メルシー」とか言ってたけれども、さらになんて言ったと思います。

「日本の経営者がうらやましい」って言いましたよ。大学を出た学生を時給1,000円、当時ユーロは高かったですから4ユーロで雇える。フランスでいうと最低賃金が6ユーロ、7ユーロぐらいのところ4ユーロで雇える。「日本語が読み書き……母国語が読み書きできる人が4ユーロで雇える？」とか言うわけですよ。そりゃあ日本の経営者はもうかってもうかってしょうがないだろう。まあ、もうかっているのは大企業だけですからね。中小企業はそれでも苦しいですけども。ここ5年の間で大企業はどんどん非正規雇用を使って、それは高度の教育を受けた若者が担っている。若者に全部押しつけて、その分の生活を親が面倒みているわけですから、そりゃあ日本の企業はもうかってしょうがないだろう。ここ5年の間はもうかっちゃったわけですけども、今はもうかるかどうか分からない時代になりました。

日本では、この変化が非常に短期間で起きたということと、若者につけを回したことと、パラサ

イトのために低収入の若者の存在が隠されちゃった、というのが特徴だと思います。では、結果的にどうなったかという、日本は少子化ですね。ドイツも少子化が起きています。ドイツの少子化と日本の少子化はずいぶん違って、結婚しても子どもがゼロとか子ども1人というのがドイツの少子化。ドイツから来た大学院生の人といろいろしゃべったんです。ドイツと日本の少子化を比較研究している法政大学大学院生の人とドイツ人の人と話していたんですが、彼が言ったのはドイツの少子化と日本の少子化は正反対だ。ドイツの少子化は、意識が変わったための少子化だ。つまり子どもを育てるよりも仕事をしたいとか、夫婦二人で楽しみたいとか、そういう意味での少子化が起きている。だけど日本の少子化を見ているとそうじゃない気がする。日本の若者の意識は昔と一緒だという論ですね。日本の若者は、夫が仕事で妻は家事で子どもを育てるのを、今でもずっと理想だと思っている。このデータ、実は裏付けがあります。先ほどの専業主婦志向の復活と一緒に、男は仕事、女は家事に賛成だっている人の割合が10代の女性で増えているんです。男性は逆ですよ。男性の意識がずいぶん変わって、男性は女性に働いてもらいたいと思っているんですが、女性のほうは働きたくないと思っている、夫の収入で暮らしたいと思っている人が結構いる。

私最近、結婚活動を略して「婚活」っていうのを広める……それで2度目の流行語大賞を狙っているのですが。ある高級お見合い紹介業の人に聞いたら、キャリアウーマンって言われている人もやっぱり収入が高い男性を望んでいると。実はうちにある独身の30代の女優が登録していて、彼女がいうところによると、生活のために仕事はしたくない。好きな仕事だし選んでほしい。生活のために仕事するのは嫌だ。女優だってやりたくない役とかもくるんですね。主役の継母役とかね、やりたくないですよ。でも生活のためにしなきゃいけない。じゃなくて自分のやりたい役だけやるような生活をしたいので、ぜひ医者か経営者に紹介してください。そんなめったに紹介してもらえないですけども。

自立しているように見える、頑張っている人

も、やっぱり収入が高い男性に養ってもらって自分は好きな仕事だけしたいっていうのが、やっぱり理想としてある。それは日本ではなかなかならないのが現実なんでしょうね。そういうのもあって結婚しなくて、結婚を先延ばしする人が増えていって、収入が安定した男性じゃなきゃいやだっていう女性がどんどん残ってしまうのは、日本の少子化の主因だと私は主張しているんですけどね。

でも、だんだんパラサイトももたなくなってきました。親が崩壊し始めたというのが一つですね。もう40、50ぐらいの親で、収入がそれほくない親が出てきましたんで、とてもじゃないけど子どもをフリーターで置いておくような状況にはない場合も増えてきましたし、さらにそれが結果的にネットカフェ難民等を欧米のように生み出した。やっとなアメリカ、イギリス並みになった。イギリス、フランス並びになったっていう例なんです。収入が低い若者たちが自立して生活しなければならない、収入が低い若者も近年、親が働けなくなっているわけです。で、最後には希望もてない人が2001年の池田小学校の事件——もしかしたら、関西って聞くとそんな被害にあった人も知り合いの中にいるかもしれません——2001年、殺傷事件から始まって、秋葉原の事件とか、起こすことになる。あの事件後に知ったんですが、ビデオ店が実はネットカフェ難民の宿泊場所になっているとは、事件が起きても気づきませんでしたね。知りませんでしたね。

というように不安定な状況に置かれて、将来がないと思う若者による道連れの犯罪は、いろいろ起きています。最近やたら、公安関係から講演に呼ばれています。

昔からいうと理解しがたいやつがいる。結局将来に絶望してやけになるような人がたくさん出てきてしまうような社会になっちゃったらしい。そういう人たちをどう取り締まるっていうんですか？ そういう絶望に陥る人が出ないような仕組みを作らなきゃいけないんですけど、でも現実には将来に絶望するような人が社会問題になっているわけです。

## パラサイト・フリーター

で、さらに最後に、私が今、一番問題視しているのは中高年のパラサイト・フリーターと言われる人たちです。中年のパラサイトシングルは多くなってきて35～44歳までの親同居未婚者が2007年で260万人。当該人口の15パーセントぐらいいます。一番が失業率。34から44歳までの人たちのうち、失業率は3.6パーセント。その年代失業率はわずか3.6パーセントですけれども、親同居未婚者に限り失業率9.6パーセントですね。もともと収入が低いから結婚できなかったりしているわけですから。親の年金にパラサイトしているんですね。親が亡くなったら生活が突如破綻してしまう。

一体どうすればいいかというのが難しいところです。彼らに希望あふれる社会を戻さなきゃいけないのはそうなんです。その中で難しいことは、私は声を大にして言っているんですが、全ての若者が高度な専門職に就くことは無理なんです。教育を徹底してやれば全部正社員で活躍できる人になれる。そう、これは新自由主義者の人も、古い左翼の人も同じこと言うんですよ。教育、訓練して、頑張っただけ努力をすれば全員が金持ちになったり、正社員になったりすることができるだろう。新自由主義の人は努力が足りないからって言うし、古い左翼の人は教育訓練をしていないからだというわけです。じゃあ、全員の人が教育訓練をしていい職に就いたら、どうなりますか。ファストフードの店員とか、検品をする人とか、朝から晩まで部品、携帯電話だってこれ部品の山ですからね。精密機械の山ですから、つまり一つの部品の故障率が99.9999パーセントぐらいじゃないと全部の機械として動きませんから。昔の真空管と言っても皆さん知らない人もいるでしょうがダンダンと叩けば治ったなんてありますけど、今ダンダンとか叩いてこんな治りませんからね。だから、部品の検品は必要なんです。朝から晩までテスターにやったり、パネルを見て傷があるかないかというのを誰かやらなきゃいけないんですよ。若者が全部正社員になって知的で高度な仕事に就いたら、誰がするんでしょうね、って

いうところまで合わせて提言しないと実はうまくいかないんですね。

あと、もう一つの方策は専門的な教育さえすればうまくいくってというのは、なかなか難しく、どういう教育訓練をした先にどういう収入のどういう仕事があるかっていうところまで用意しておかないと、ただ教育・訓練が大切だと言っても、実はどうにもならないわけです。その最たる例が高学歴のワーキングプアだと思います。先ほどの大学の先生の例でも常勤・非常勤格差が大きいと言いましたが、実は保育士や介護士の間でも格差がありますよね。現場は知っていると思います。私も東京都教育委員をやったときに保育園データを出させたら、正規の公務員保育士の平均年収は800万だったのに、私立の非常勤の保育士の平均年収300万。ほとんど同じ仕事をしているのに格差が3倍にもなっている。昔は保育所が少なかったから、保育所の先生の平均年収800万でも社会が耐えられましたが、ここまで保育所があったときにすべての保育士に年収800万も保障しろって言ったら、システムが破たんするか利用料が高くなるかどっちかですよ。

介護も一緒ですね。高齢者が少なくて介護される人が少なかったときには、公務員の平均年収600～700万で介護をする人で良かったんですが、ここまで高齢化が進んで介護されたいという人がたくさんになったときに、じゃあ、すべての介護をする人を年収500～600万にしちゃおうっていったら、財政が破たんするか、税金が高くなるか、利用料が高くなるか。利用料が高くなって普通の人が利用できなくなるか、どっちかですね。だからと言って放っておいていい問題でもない。

というような非常に難しいというか、ジレンマが出てきている状況です。でもこのまま放置したら、絶望にあふれる人たちがどんどんあふれるという状況になってきてしまいますから、今後、社会で低賃金低収入に就いている人たちのどういうふうに対処するか、誰にやってもらうか、っていうのを考えていかなければと思っています。ちょっと超過しましたが、このくらいで午前中のお話は終わらせていただきたいと思っています。どうも、長



い間ご清聴ありがとうございました。

古賀：山田先生，どうもありがとうございました。山田先生にもう一度，拍手をお願いいたします。

ずいぶん殺伐としたテーマでしたけれども，明るく楽しく何とかせないかんという話なんですけれども。午後1時から社会学，福祉の専門家の方々を交えて，じゃあどうすればいいのか，というこ

とで議論を深めていきたいと思います。パネリストは，本日の山田先生を含めまして，宮本先生，山縣先生，山田谷先生，野村先生，で，コーディネーターが亀山教授でございます。1時から行います。12時半からこの部屋を開場しますので，またご参加いただけたらと思います。では，これをもちまして午前中の部の基調講演会を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

---

# 社会学部開設 20 周年 記念シンポジウム

---

テーマ

「社会的排除を考える」ー子ども・若者の場合ー

パネリスト

山田 昌弘 (中央大学教授)

宮本みち子 (放送大学教授)

山縣 文治 (大阪市立大学教授)

山田 容 (龍谷大学准教授)

野村 洋平 (龍谷大学非常勤講師)

コーディネーター・司会

亀山 佳明 (龍谷大学教授)

(敬称略)

司会：それでは記念シンポジウムを開会したいと思います。

本日のシンポジウムのパネリストをお願いしています先生方をご紹介します。

まず午前中、基調講演をいただきました山田昌弘先生です。山田先生はすでにご紹介しましたが、東京大学の大学院社会学研究科を修了、それから東京学芸大学の教授を経られまして、現在中央大学教授でいらっしゃいます。専門は家族社会学、感情社会学。主な著書に『パラサイトシングルの時代』、『パラサイト社会のゆくえ』、『希望格差社会』など多数ございます。

続きまして、そのお隣、宮本みち子先生をご紹介します。宮本みち子先生はお茶の水女子大学大学院家政学研究科を修了、千葉大学教授を経られて、現在、放送大学教授でいらっしゃいます。専門は青年社会学、家族社会学です。主な著書に『若者が《社会的弱者》に転落する』、『若者政策の展開』、それから訳書として『若者はなぜ大人になれないのか』などがございます。

続きまして、そのお隣、山縣文治先生でございます。山縣先生は大阪市立大学生活科学研究科前期博士課程を修了されて、現在、大阪市立大学の教授でいらっしゃいます。研究分野は社会福祉、子ども家庭福祉でございます。主な著書に『現代保育論』、『児童福祉論』など多数ございます。

続きまして、そのお隣、山田容先生でございます。山田容先生は同志社大学の大学院社会福祉学専攻を修了されまして、現在、本学社会学部の准教授です。専門領域は子ども虐待、ソーシャルワークでありまして、主な著書には、『新 社会福祉援助の共通基盤』などがございます。

そのお隣、野村洋平先生です。野村先生は本学、龍谷大学大学院社会学研究科博士課程を単位取得退学されて、現在、本学部で非常勤講師を務めていらっしゃいます。専門は子ども社会学です。主な論文に、「新しい「無垢」概念の形成に向けて——エマニュエル・レヴィナスとフランツ・カフカの思想による子どもの再発見」、あるいはまた「「いじめ」再考：「いじめ」の存在論的解釈をめざして」などがございます。

最後に、このシンポジウムのコーディネーター

の亀山佳明氏でございます。亀山先生は京都大学大学院教育学研究科博士課程を修了し、教育学博士を取得されています。文化社会学、教育社会学、スポーツ社会学が専門で、主な著書に『子どもと悪の人間学』、『夏目漱石と個人主義—〈自律〉の個人主義から〈他律〉の個人主義へ』などがございます。

以上のような先生方によって午後のシンポジウムを進めてまいります。それではコーディネーターの亀山先生、司会をお願いいたします。

亀山：ただいま紹介をいただいた亀山です。きょうはご覧のような先生方をお迎えしてシンポジウムを行います。午前中に山田先生にお話をいただいたんですが、午後からお見えの方々もおいでかと思しますので、まずその内容を簡単に要約させていただいたうえで、それに基づいて、きょうの講師の先生方に質問なり自分の見解なりを展開していただくと考えております。

昨日、五木寛之さんがお見えになって講演をされました。その冒頭に「和気あいあいというのはいいものだ」とおっしゃったのです。きょうは幸いというか、どういったらいいのか分かりませんが、人数も少人数なので和気あいあいとやりたいと思っております。会場の皆さま方にもご協力のほどをお願いしたいと思います。

## 講演の要旨

前置きはその程度にいたしまして、まず要約をさせていただきます。山田先生の議論は非常に詳しく展開されております。お話の中ではディテールにも触れていただいたのですが、そういうのははしらせていただいて、簡単に要約していきたいと思えます。

「希望格差社会を超えて」ということで、この場合の「希望」というのは何かということです。そこに引用がありまして社会学者 Nesse という人が言っていることに尽きると思うのです。「希望は努力が報われると感じるときに生じる。努力しなくても同じだと思えば絶望が生じる」と、こういう議論です。

これがおっしゃりたいことで、それを社会的な



シンポジウムの風景

仕組みから説明していかれるわけです。一番根底には現代社会の認識があります。われわれは資本主義の社会に住んでいます。その資本主義の社会システムが大きな変換を遂げた。ヨーロッパでは1980年代といわれています。日本では1990年代、特に1997～1998年を境に大きく変わったのではないかと見ておられます。

それ以前が、オールドエコノミーの時代、これは誰も一生懸命働けば将来に希望が持てる、そういう社会であった。仕事もそういう意味において現場で一生懸命勉強すれば能力も高くなる。将来家を建てることもできる、とみんな思っていた時代だったということです。それに対して、ポスト工業経済と書いておられますが、ニューエコノミーの時代がやってきたわけです。

ニューエコノミーっていうのはどういうのかというと、まず産業の在り方が随分変わっていく。分かりやすくいうと仕事が変わってしまうわけです。仕事の現場がハイテク化されていくわけで、そうしますと労働の形態が変わります。少数の非常に能力の高い、つまり付加価値が付けられる、そういう有能な人たちが正社員になってる一方で、多くの人たちは非常に単純な労働、定型労働と書いておられますが、そういう仕事に就かざるを得ないということになります。そういう経済システムの中で労働形態が二極化するということでは

す。少数の正社員と大量のアルバイトですむような定型労働の方たちが生まれてくるということでもあります。

それが仕事の二極化となります。この二極化した仕事を担う人たちとは、どういう人たちなのか。日本の場合には、後者を若者に回してしまった。つまりつけは若者に回されたということです。そのために、20代の方々に年取が150万円以下の層が大幅に出てくる。そういう人たちはどういう仕事かという、フリーターを仕事というかどうかは別として、フリーターの形態あるいは派遣社員、契約社員、請負とか、こういう定型作業労働者が増大してしまうということになります。

では、低賃金の若者たちはどうやって暮らしているのかというと、日本の家族形態がそこに関係してきます。つまり多くの若者たちは、親に扶養されるというパラサイト（寄生）をすることができる。つまり、日本の家族の場合には長いこと自立せずにそういう形で同居していくということが可能です。ですので、アルバイトで暮らしても親に寄生していますから、生活ができることになっていきます。

しかしながら、そういう若い人たちはいつまでもそういうことはできない。そういう人たちが正規の仕事を求めようとして、努力してもなかなか

得られない。そういうワーキングプアにドンドン転落していくような形をとっていかざるを得ない。これを「底抜け」とおっしゃっています。三角形の頂点の部分は上により高く行くんですけども、底辺層が非常に増えてきて、その底が抜けていく。ほとんどもう正規労働形態の中に入れない、そういう層が固定化していくのではないかと。そういう経済の領域、つまり分かりやすくいうと収入です。収入が固定化して、非常に少ない収入の人たちがたくさん増えてくると、それが家族システムに影響を及ぼしてくるということです。経済的・精神的に余裕がない。しかし、そういう人たちも結婚しますので、できちゃった婚とかが生じていきます。しかし、その家族が非常に不安定ですので、児童虐待の温床になっていくのではないかとということをおっしゃいました。

そういう底抜けが大幅に出てきますと、その社会に生きている人たちの社会心理に大きな影響が出てきます。つまり社会システムの上に、社会心理というものがあるわけですが、それが相互に関連していきます。大幅に経済システムがそういう形で固定化していきますと、いくら努力しても上にあがれない。ということで、多くの若者たちが希望を持ってないことになっていきます。そのために努力しても仕方がないという形で無気力な社会心理が瀰漫（びまん）していくということになります。

先ほど見ましたように、家族形態としてパラサイトは可能です。しかしそれが10年、20年続きますと、さすがの親たちもくたびれ果てますので養えない。中高年のパラサイトがこの結果生じてきます。これが2007年度で260万人もいるのではないかと、という深刻なことをおっしゃっております。こういう後期資本主義社会を日本の場合も迎えて、社会システムのレベルでは格差は生まれますが、社会心理のレベルでも格差が生じてしまう。これが、希望が持てる人たちと希望を持ってない人たちに分かれてしまう。希望の持てない人たちはいつまでも希望が持てない。つまり絶望に入っていくのではないかと、ということをおっしゃっていました。

そういう意味で現代のわれわれの今置かれてい

る状況を的確に分析なさったわけです。大ざっぱな要約ですが、それぞれのところで関連する先生方を講師にお招きして、山田先生の基調報告をベースにいろんな議論を投げかけていただくということにしたいと思っております。

まずトップバッターを宮本先生にお願いしたいと思っております。宮本先生には若者の問題、つづいて回されて希望を持ってない、大量のフリーターないしは派遣社員をやっている若者たち、この若者たちのことを中心にお話をしていただきたい。特に先生は比較若者論という視点をお持ちで、これが日本だけの状況なのか、どうもそうではないらしいということです。ヨーロッパとも比較されながら、さらなる議論をしていただきたいと思っております。

それでは、宮本先生、お願いします。

## 若者たちの排除

宮本：宮本でございます。トップバッターということで、少しお話しさせていただきたいと思っております。

私も何年か前からこの若者の問題を研究してきました。この間、毎年いろいろな国を回りながらつまずいている若者の問題とその若者に対して社会がどういう支援の制度や法律を持って具体的に取り組んでいるのか、というようなことを具体的に見ようとしています。先日オーストラリアへ行ったときにも、こういう話を聞きました。

オーストラリアでも20年ぐらい前から労働市場の構造が変わり、グローバル経済競争の中でかつてのような安定した雇用の世界というものがなくなって、その中で一番大きな打撃を受けたのが若者たちだったという言い方をしています。こういうフレーズは、実はオーストラリアだけではなく、どこでも先進国へ行くと同じような言い方がされています。

日本みたいに終身雇用制を持っていない国は、もともと若い人のほうが新参者として出ていくので不利な状況があるわけです。特に労働市場が、先ほどの午前中の山田先生のお話のように、単純労働の世界が、かつてのように何とか生活はできたという状況がなくなって、しかも途上国の本当

に低い賃金と競争しなければいけない、低さを競争しなければいけないようになってから、このような仕事の世界に入らざるを得ない人たちの問題が出てきた、ということです。

そこで日本の問題について考えてみたいと思います。もともと半分以上の人が大学へ行くような時代に入っているわけですよ。大学を卒業した後も、本当に親に頼らないでも自分で生活ができるようになるのには相当な長い年月がかかる状況になっております。これは日本だけではなくて、先進国ではみんな共通して、長い移行の時期、青年期から大人になるまでの移行の時期を経なければ一人前になれなくなっている、これが先進国の持っている特徴だと思うんです。その長い時期の試行錯誤を認めて、そこでつまずいて落ちないためのセーフティネットが張られているかどうか。それから試行錯誤を支援するような社会の仕組みを持っているかどうかによって、試行錯誤しながら自由を十分享受しながら一人前になっていくことができるかどうか、の分かれ目があるように思います。

日本に関していいますと、若者の問題を国としてやらなければいけないということで、この5年間ぐらいさまざまなメニュー、プログラムが登場しまして、各地で若者支援が始まりました。その現場にかなり深く関与して見ている中で、いろいろなことが分かってきました。ちょっとそのことをお話しさせていただきます。

山田先生のお話のとおり、単純な低賃金労働に就く人たちはどういう人なのか、という問題です。誰がそこに就くのか。その処遇はそのまんまでもいいのかどうかということなんです。まず一番はっきり言えることは、高学歴化する社会の中で早くに学校を去っていく若者たち、この人たちが一番不利な立場に立たされていると思われまます。例えば失業率でいいますと、中卒の学歴の方たちの失業率は現在でも15%です。

現在、雇用者の3割は非典型雇用です。非典型雇用というのはパート、アルバイト、これをフリーターというんですよ。あと派遣とか契約これを全部含めて非典型雇用といっております、この非典型雇用が2000年代になってから急激に

上がってきておまして、今年が変わり目ですが、少し前まで若干新卒者の雇用が改善されたといわれる中でも、非典型雇用率はずっと上がりっぱなしです。非典型雇用の一番割合が高いのはどこかという、中卒なんですよ。次いで、高卒、そして短大、専門、そして大卒という順番になっております。

この中卒というものの意味なんです。実は中卒のほとんどが高校中退です。この間、若者の支援の現場でだんだん見えてきたことは、フリーターの状況の中で、その先がなかなかうまくいかないで苦しんでいる若者たち、それから例の無業の状態にある若者たちの中に、中退者が非常に多いのです。これは支援が始まってみて分かったことです。ニートの状態の若者の3割から4割ぐらいが中退を経験している人たちだということが分かってまいりました。でもこれも支援の現場に来た人たちの中の割合ですので、全体でどうなっているかということは統計データがない状態であります。

ところが半分の人が大学に行く時代に高校中退するには、それなりのわけがあるわけです。この問題は今まで放置されてきたと思います。文科省の発表によりますと、高校中退率はだいたい2.1~2.2%でちょっと上がっているくらいです。2%っていうと普通の人が聞くと「ああ、なんだ、2%か」と。そうすると100人の中の98%は中退者じゃないのだと、こう考えますよね。ですけれどもこれは実はそういう見方をしてはまずいんです。なぜかと申しますと、中退問題は偏在して起こるのです。

## 学校中退者の状況

先日、読売新聞で二日間にわたって中退問題に関する特集記事が掲載されました。この記事を書いたグループとは最初からかかっています。埼玉県は約150の高校があります。入学したときの偏差値で高校を5分の1ずつに分けます。そうしますとこの2000年代、景気が悪くなり若者たちの状況が悪くなった中で、どこにどういう異変が起こったか。一つはこの中退者の中に起こってきているものです。

このデータによりますと、1997年入学した人たちの中退率です。この中退率が偏差値ときれいに比例しているんです。2000年代に入りますと、その中退率がぐんと上がるんですが、どの高校グループでも上がったのではなくて、偏差値の1番下の5分の1と下から2番目の5分の1の高校グループの中退率がぐんと上がったのです。

具体的に話を聞いてみると、下の5分の1のグループの高校では入学したクラスの生徒40人が、3年たつと半分に落ちているという状態だというわけです。もう一つ、この新聞でも発表しているのは、この同じ時期に授業料の減免率、つまり所得が一定以下で授業料の減免を許可された家庭の割合です。これもはっきりと学校差があつて、進学校ではほとんど増えていません。ゼロコンマ幾つぐらいです。でも若干増えているのは景気の動向に比例しています。ところが、偏差値の点で一番下の5分の1とその上のもう一つ5分の1のグループは2000年代に入って授業料の減免率が倍になったんです。こういう形で成績と中退率と減免率がきれいに比例して非常に大きな格差を描いている状態にあります。

そのことが第一点です。それからもう一つ、トップバッターということでお話しさせていただきたいのは、どういう若者たちが学校を終わった後につまずいているのか、という実態についてです。先ほど山田先生が社会学はみんなが見たくない現象を暴露する学問であつて人気がないというお話でした。実は若者支援の現場の状況、とくに、ニート支援の現場が一番よく分かるんです。ニートに関してはまだまだ多くの誤解偏見があります。つまり健康な若い肉体を持っている若者たちが、なぜ、無業でいるのかと、こういう言い方をする政治家、経営者たちはものすごく多い。圧倒的多数がこういう論ですし、一般の市民もそういうレベルにとどまっています。

実際に2004年ぐらいからニート支援が、国の政策で始まりました。始まったときにはニートの状態の人が、統計データの的には62万人とかいうけれども、実際になにゆえその人たちが無業でいるかということとはまったく分からない状態の中で始まりました。国の資金で動いていますけれど

も、実際のサポートをやっているのは民間のNPOです。

始まってみて分かったことなんですけれども、つまずいている若者たちの実態は非常に多様です。つまずいている若者たちは、先ほどの山田先生のお話でいうと、社会から排除される状態にあるんです。放置しておくとそのまま永遠に排除され続けるだろうと思わざるを得ないような状態があります。

まず第一点です。日本の場合、雇用の流動化とか多様化といわれていますが、依然として新規一括採用の仕組みは壊れていなくて、特にいわゆる大企業といわれる企業は新卒者だけを狙っているんですよ。この間もそうですし、今後ともなかなか変わらないと思います。新卒市場に入らない限り、あとどんなに努力しても挽回できないような状況があると思います。その中で新卒市場にうまく入れなかった人、それから離職者です。新卒で入っても七五三というぐらいで、離職者が非常に増えているわけです。

七五三ですから、大卒は3割の人が3年たつと離職する。高校卒の人が5割、中学卒の人たちは7割が3年で辞めるといわれています。その離職した人は、不利な形で再就職せざるを得ない。これは、さまざまな統計データが示しております。そういう形で労働市場は非常に過酷に選別化しているんだけど、山田先生の話のとおり、仕事の世界の不利が、90年代までの不利さと違うのです。暮らしていられないぐらいの不利さになっているという状態があります。

その一方で、そういう労働市場に入らなければならぬ人たちが、どういう主体的な問題を持っているかということ、ちょっとお話しさせていただきます。三つぐらいあると思われれます。一つ目は家庭などの問題です。その若者たちの背後にある家庭状況ということで、まずは親の経済力がないこと。親の経済力がないということは、不利の状況がずっと前から続いているということです。このあたりは、あとの3人の先生方からお話があると思います。子どものころから不利を抱えている人たちが大人になって、いよいよ労働市場に出て勝負しなければいけないというときに、有

利な競争はできないという、当たり前といえば当たり前のことです。それと同時に、大人になるのに長時間かかるという現代社会の中で、その長期間を誰が支えてくれるかという問題です。

親が抱えられなければもう裸のまま勝負しなければいけないということですが、勝負できないんです。そういう実態があるっていうことです。もし後半で時間があれば具体的にお話しさせていただければと思います。それからまた家庭に関しては経済の問題だけでなく、親の離婚、家庭の崩壊というようなことを抱えている人たちが非常に多い。これはもう現代社会の特徴だと思いますし、欧米諸国ではもっとずっと前から家庭のそういう問題を抱えた若者たちの問題がたくさん論じられてきました。今、日本がまさに先進国と同じようにして論じなければいけない段階にきているっていうことを実感を持って感じます。

もう一つですけれども、教育上の問題だと思います。日本は文盲のいない国だ、とずっと前からいわれたと思いますが、大人になって履歴書も書けない若者たちが相当いるという事実があります。読み書き能力、計算の能力です。他の先進国へ行きますと、そこの国の言葉が話せない読み書きできないという、外国人労働者問題が真っ先に言われますけど、そういう労働者が少ない日本の中で、日本国籍で日本生まれの若者たちが読み書き計算ができないという問題。学校時代に放置されてきたという問題があるように思います。

### 若者支援の状況

今、若者支援現場で学び直し教室を開いているところがあります。年齢的にいうと20代後半から30代の若者の、読み書き計算のセミナーです。公文式みたいな問題を、一人ひとり個別問題でやっています。本当に真剣に取り組んでいます。その中には「もし10年ぐらい前に、こういう機会があったら自分の人生は変わったはずだ」と言われる方がいるというような状態です。これは学校教育問題であると同時に、読み書きがどこかで完全に止まってしまった人たちに対して、学校だけにまかせきりにしていた問題があるように思います。これだけ高度化した労働市場の

中で読み書きができない人たちは、いい仕事に就けるわけがないという、極めて現実的な問題があります。

もう一つですけれども、健康医療問題あるいは障がい問題とっていいことですが、これも支援が始まって発見されたことなんです。いわゆる障がい者に関しては、もう既に確立した障害者福祉の世界があると思います。実はつまずいている若者たちの問題ってというのは、もっと多様な障害なりハンディというものがあって、それが気づかれられない、あるいは適切な対処がされてないまま大人になっている、という問題があると思います。最近になってようやく国が取り組み始めたのが、発達障害問題です。発達障害問題は学校現場の中では、学習障害等々で少し前からいわれるようになってきたことです。20代から30代になって仕事につまずいているだけでなく、社会の中にもうまく適応できてなくて、孤立した状態にある人たちが、発達障害の傾向を持っているということがいわれております。これはもう雇用対策だけではなくともできない問題です。

それからもう一つ精神的な問題で対人不安傾向を持ってる若者たちが極めて多いという問題です。精神・神経科を受診している人がとても多いのです。その背景は、まだまだ十分に分かってないのです。ただいえることは学校時代のいじめの経験を持っている方たちがかかなり多いっていうこと。家庭に関しては、まだまだよく分かってないけれども、DV問題もあるだろうと思いますし、さまざまなハラスメントとか、何かそういう問題を抱えて対人不安を抱えている若者たちが、仕事に就けないだけでなく社会生活ができにくい人たちがだという感じがしております。

時間が来たので一応このあたりまでと思います。グローバル化した競争的な時代の中で、単純労務の世界では、食べていかれないような状況が起こっている。もう一方では、子どもが大きくなるプロセスの中で、社会の中にきちんとポジションを得られる条件を失っている人々、子ども、若者たちがかなりたくさんいるのではないか。このあたりのことを考えますと、一言でいうと雇用とか福祉とか医療とか、単独の問題ではなく、も



っと広い総合的な視野で、この問題を検討しないといけないのではないか。このあたりから社会的排除問題を考える必要があるのではないか、というようなことで問題提起をさせていただきました。

亀山：どうもありがとうございました。宮本先生には若者の置かれている、特に一番不利な状況に置かれている人たちのことを取り上げていただいたと思うんです。お聞きのように経済的な領域で起きている大きな変動が、社会システムのほかの領域に連動してしまっている。

例えば、先ほどは学校教育の問題に触れていただきました。それからさらにその子どもたちを支える家族の問題、こことも連動していろんな現象が起きてきているということのをわれわれは知ることになってきています。

知れば知るほど「なんだあ暗いなあ」と、なっていられるかと思います。できるだけ明るく語りたいたいと思っておりますので、これは決して不謹慎に言っているわけではなくて、暗い話を暗くやっていると気が滅入りますので、そういう意味でお許しいただきたいと思えます。

ということで、先ほど宮本先生に、うまく福祉の領域との重なりのところをご指摘いただいたので、引き続きまして山縣先生に福祉の現場での経験の辺からお話を出していただけたらと思っております。

では、どうぞお願いします。

### 福祉現場からの意見（1）

山縣：大卒の単純3K労働参入者を養成しております山縣です。なんかわれわれの世界の仕事は非常に辛いという話を、お二方の話から感じておりました。私は、私自身のことも語りながら現場のことをお話しさせていただきたいと思えます。

私は25年ほど前まで児童養護施設いうところの児童指導員をやっておりました。大学に帰ってくるきっかけになったのは、認可外のベビーホテルで赤ちゃんがばたばた死んでいくという事件、いわゆるベビーホテル問題です。ロッカーの中に預けられた子どもたち、送迎バスのシートの下から発見された子どもたち、なんていうのがあった

んですよ。そういうので当時、私が働いていた施設で、夜間保育所を造ることになりました。民間で夜間保育所をつくった全国7~8番目の施設です。そのとき夜間保育の世界に入って、いろんな人たちと交流させていただき、いろんな調査もさせてもらいました。当時われわれがビックリしたのは、夜間保育、認可の夜間保育所を利用している家庭の平均30%が母子家庭であったということです。父子家庭はほとんどありませんでした。当時、昼間の保育所では5%前後でした。3から5ぐらいがだいたいの数値でした。4倍から5倍ぐらい、もうちょっとかな、5~6倍だったかな。今となっては全く不思議ではない状況ですが、当時はそれはすごい世界だったんですね。ある夜間保育園は、偶然行ったとき100%母子家庭でした。

そんな世界で私は仕事をさせてもらったんです。それから、昼間の保育所の世界の方々ともお付き合いをするようになったんですが、その世界と付き合っておりましたら、また新しい層に出会うことになりました。ちょっと一緒に考えてみてください。日本中で、今小学校に入る前の子どもたち、0歳児から5歳児を100と見ましましょう。多くの子どもたちは、保育所か幼稚園あるいはどこにも属していないという形になります。認可外なんかもありますが、それはちょっと別です。保育所、幼稚園、それ以外の家庭を中心に考えてみます。一番たくさんいるのはどこだと思いますか。保育所にはどれぐらい今行っていると思いますか。大体、今、日本でどれぐらいかという保育所が31%になります。幼稚園が26%ぐらいです。引き算すると残りが43%ぐらいになります。その中には、数%認可外あるいは障害児の施設なんかがありますから、数%は下がりますが、どっちにしても一番多いのは地域で家庭にいる子どもたちということですね。

実は、その層が今女性の就労ということに着目される中で、置き去りにされていたというのが、この15年間、福祉の世界といいますか、保育の世界が気が付いていたことなんです。社会的排除というのは、そういうきつい言葉では言いませぬけども、施策がほとんど届かなかった層という事

実は認めざるを得ない。地域子育て支援という言葉がはやっていますけども、実はそこにターゲットを当てたものです。その層からうめき声が聞こえてきたわけですね。子育てがしんどいとか、子どもは好きですけども、嫌いではないけど、時々自分を取り戻したいことがあるとか。やっぱり一番つらい状況になると虐待という形で現れてきてしまうということが分かってきまして、その世界にも今は足を突っ込んで仕事をさせていただいています。

社会的養護という、非常に世の中から見ると量的には非常に小さい世界から、今、子育て支援という就学前の多数派のところまで、ちょこちょこ顔を出させてもらう仕事をさせてもらっているんです。その中で、きょうのテーマであります格差問題とか、社会的排除ということを考えてときに、私は山田先生と宮本先生の話に共感する部分があります。格差そのものが問題ではないんだと思います。これはちょっとときとされるかもしれませんが、家族社会学の山根常男という先生がいるんですが、その先生から学生時代に教えてもらったのが「核家族化が問題なのではない。核家族が孤立化することが問題だ」ということで、言われてなるほどなと思ったんです。今、その言葉を格差ということに置き換えてみると、格差そのものよりもむしろ格差が固定化してしまう、あるいは——これは山田先生の話でしたね。宮本先生の話でいうと、格差が世代間連鎖をする。すなわち、長期的に固定化してしまうというところに、非常に大きな問題があるのではないかと。逆転ができない社会、逆転できない、一番底ににいるというのは失礼ですけども、社会的養護の子どもたちに代表されるし、今、中卒という名の高校中退の子どもたちがややそこに近い状況に恐らくなりつつある。今、第一世代ですから、まだ親にパラサイトできる状況にある人も結構いますけれども、恐らく次の時代にはそうならないかもしれないということではないかと思えます。やっぱり、子どもたちは世代間連鎖の影響を直接受けてしまう層なんだというふうに考えざるを得ない。

これは、学歴でもお話しされましたけども、経

済問題が非常に大きいですね。学歴、経済問題は非常に大きいわけです。結果としての職業を見たときに、政治家はもう世襲ですよ。世代間受け継ぎ職業ですが、大学の教員もややそういう傾向がある気がします。うちの子は嫌だと言っています。先ほどの山田先生のお話でそれに近い状況にあるのではないかと。医者がそうですね。スポーツも実はそういう部分があると思っていました。野球なんかそうですね。どうですか、浅田真央、フィギュアスケートの世界を見てください。親からの職業を受け継がないけど親の金を受け継いでいます。程度の高さ、低さはあるかもしれませんが、かなりの部分が子どもたちの人生を親の状況で説明できるようになってしまったのではないかと、というようなことを感じています。

それから、山田先生が底抜けという話をされましたけども、私は別の表現をしてみました沈殿というちょっと古い言葉を使っているんです。若干似ていますね。若干、微妙なところがあります、気持ち的に。三角フラスコに片栗粉を入れて水を入れた状態と私は思っています。上をパチャパチャとたたくと上の辺だけは緩やかに溶けていくんです。でも、一番底は硬いまななんです。溶けないんです。上の層だけには微妙に届いている感じがする。施策を提供する人たちはそこまで届くという計算の下にいるんだけど、あまりにもその社会的養護の部分までは届かないというのが、今この状況ではないかということを考えています。

もう一方、きょう実はあまり大きな話題にはならなくて、亀山先生が先ほど三角形の中辺部分が細くなるという話をされましたけども、実は私がそういう人たちに会おうと、上の人たちも相当不安がっていますね。落ちるのではないかと。上から落ちることに、落ちたら上がれないということはかなり知っておられますから、落ちることの恐怖感というのはすごいですよ。私なんかはでんぶんの上のほうにいる人間だと思います。たたいてもらえれば、まだ若干跳ね返りがあると思っていますが、あきらめきった人たちとは違う苦痛があります。それは、希望を感じたいがためにあえているんです。それを子どもたちにその希望を受

け継がせたいと思っているためにあえいでいる、そういう人たちの声。上の人たちが決して安穩と希望とか、夢に浸っているわけでは必ずしもなさそう。常に恐怖心に怯えています。それは、かつてのように下克上で下からひっくり返されるということじゃなくて、みんなが下に引っ張られていくという感じですね。そういう世界なんですよ。

## 養護の世界

社会的養護の世界で、指導員をやっていたころ、中卒が当時は多かったんです。中卒の子どもと就職を探しにいくと、いったん就職してもなかなか続きません。その子は非常に技術力が高かったんです。何が高かったかという、小学校のころから車の運転をしていました。中学のときには車を運転して他県まで逃げたこともあります。それぐらい運転の技術が高いんです。ところが、中卒の運転手というのは当時でもなかなかなかったんですね。求人には高卒と書いてあるんです。今もそうですよね。はっきり高卒、大卒の運転手。「タクシーの運転手募集 大卒」と書いていますから。技術だけでは、なかなか採用してもらえない。当時、職安とけんかをしたことがあるんです。「中卒の子はもうない。ましてや親がなかったら大変だ。今どき下宿、賄い付きなんてほとんどないですよ」と言うから、「この子らは就職がないのか」とどなりつけたら、若い人がすっと立って、「職安に来てもらっても仕事はありませんが、スポーツ新聞を見てください」と言うんですね。スポーツ新聞の広告欄には学歴がなかったんですよ。朝日新聞を見ると、学歴ばかりで、タクシー運転手でも学歴が書いてある。学歴が書いていない職業紹介があって、隣にびわこ競輪、競艇が書いてあって、その隣にローン屋さんが書いてあって。一面で生活がすべて終わってしまう。そんな世界です。

今、そういう世界に養護の子どもたちだけでなく、恐らく先ほど宮本先生が言われたような世界の子どもたちがどんどんと近付いてきている。高卒でさえ就職がない時代なのに、ましてや児童養護施設で高校に行かせる時代になりましたが、

そこから出る世界というのは職安ではなかなか仕事がない世界で、指導員の方々とか、関係者の方々は必死で自分のコネクションとか、いろいろな付き合いの中から探してくる世界。子どもたちは今そんなところで生活をしているという感じがしています。

ぼちぼちこれで終わらなきゃいけないんですが、あと2~3分です。希望がなくても楽しく生きていける幸せというのを、少し山田先生が言っておられましたけども、社会的養護の世界をみると、もう遠い世界になってしまったという感じがします。それは、世代間連鎖というのが今一番大きい問題ではないかと思っています。この言葉は、虐待の世界の中であまり使うな、希望をそれこそ失うから使うなどと言われるけども、実態としてやっぱり受け止めざるを得ないですよ。虐待を受けていた子どもたちが、大人になってまた虐待をする。いじめを受けていた子どもたちが、いじめを繰り返す。

数日前、ある児童養護施設で話し合いを数時間やっていたんですが、中学生の女の子が同室の女の子を裸にして性的なことをやるわけですよ。問題犯罪行為が行われたわけです。ところが、犯罪行為をしていた子どもに指導員が聞くと、何が起こっていたかという、自分自身が数年前までこの施設でもうすでにその立場にあったと。自分がそうやって育ってきた。そのことを今次の世代にやっているだけなので、何が悪いか。あのとき先生方は自分を守ってくれなかったじゃないか、気が付いていたはずだ、ということを知って、返す言葉がなかったそうです。

そこをどうするかという話し合いだったんです。つないでいってしまう自分たちの弱さですね。あとで、またいじめの話野村先生から聞きますけども、形を変えながらつないでいく。同じ形でつないでいけばまだ断ち切りやすいところはあるんですけども、形を変えながら——いじめなんていうのはその代表だと思うんですけども——いじめという言葉は一緒だけど方法が全然違う。使う媒体が全然違う。そういう形でつないでいくところを、どう私たちは断ち切っていくのか、ということ、福祉関係者としては提案を

しなければいけない。じゃ、どうすればいいんだ、ということなんです。

教育も駄目だと言われましたし、金もないと山田先生は言われましたから、今はちょっと答えがよく分からないのです。あとでほかの人の話を聞いてから一緒に考えようかなと思っています。大体、15分たちましたのでこれで話を終わります。

亀山：ありがとうございます。明るく語っていただきまして少しほっとしました。内容は深刻なものです。ということで、福祉のほうからのアプローチがありました。引き続きまして山田容先生。山田先生が2人おられますので容先生と言いますが、容先生のほうからまたいろいろと議論を出していただきたいと思います。

## 福祉現場からの意見 (2)

山田 (容)：山田と申します。今までの先生方のお話は、非常に刺激になりました。私の息子は大学受験、大学に行くという話はわりと希望を持って語れても、そのあと何をするかという話になると途端に暗くなります。大学までのイメージはできるんですけど、どういう仕事をするのか、自分はどういうふうに社会に属したらいいのか、ということになると、暗たんたる顔になってきます。希望が一応持てる状況にはあると思っていますが、希望を持つこと自体のしんどさ、希望を持つような生き方をしなければ自分はいけないんだ、というちょっとした追い込まれというんですか、そういったものも生じているのかなと思います。

さて、山縣先生が先ほどおっしゃった孤立という言葉は、非常に重要だと思います。私は子どもの虐待の支援をする人たちの隣にしようと思っ、いろいろなところに行っているのですが、虐待は、これまで心の問題として扱われるという傾向が強かったんですね。親の未成熟であるとか、異常性が非常に強調されて報道されてきました。確かに何らかの病理的な要因もありますが、調査を見ますと明らかに貧困が非常に大きな要因です。

平成15年の調査では、虐待が起こったケースの中に、所得税が課税される一定の所得があると

いう家庭は約23%にすぎなかった。不明が約30%、その他が明らかに所得税が課税されない程度の年収、生活保護の割合が約20%でした。これはかなり高いですよ。母子家庭の割合は約30%、父子家庭が約5%です。母子家庭は全世帯平均でいうと約4%、父子家庭にいたっては1%未満ですから、1人親家庭がかなり多いということになります。ただ、これは1人親だからというわけではなくて、1人親家庭というのは大変経済的に苦しくて、母子家庭の平均収入は200万円台以下なんですね。

ですから、明らかに貧困という要因が非常に大きいわけです。虐待現象が注目された90年代の中ごろは、日本でまだ貧困という言葉をあまり使われなかったんですね。どちらかというと不況とっていたので、経済状況は一時的なものとしてとらえられて、病理のほうに関心がいったと思うんです。

ここで子どもの問題としてどう考えるかなんですが、虐待支援は二つのポイントがあると思っています。きょうの子どもをどう守るかという切迫した問題と、将来に向けて子どもの暮らしと生きていく力をどうつくっていくかという未来の時間軸があるわけですね。現在に関していうと、これは基本的には分離するかどうか、施設に入れるかどうか、一時保護所に入れるかどうかというような緊急事態を判断する。もう一つは、長期的に見てこの子どもたちをどう支えていくか。どういう場でどういうサポートをしていくかということです。施設に入れたらいいんじゃないかと思われるかもしれませんが、子どもたちが施設に入ってそこからどういう暮らしをしていくか、どういう支えを世の中で持てるかということ、やはり非常に心許ないことがたくさんあります。これは、もう先ほど山縣先生からお話がありました。

## 福祉と教育の問題

そこで教育の問題というのはすごく大きいと思っています。虐待の問題というと、子どもへの心理的な影響というのがすごく強調されて、生きづらさということがよく使われるのですが、それは社会的なつながりが持てないというところで現実

的な問題になってくると思うんですね。学校に行けない、あるいは学校に行ってもストレスを常につけてしまって、友達ができない。それで、学力が形成されない、また生涯にわたって支えてくれる友人というものを持たない。さらに家族との関係も悪い。こうなってきましたと、湯浅誠さんがおっしゃっている、「溜め」、つまり何か困ったときに自分を支えてくれる余力のようなものを持たないまま厳しい競争社会に放り出されていく子どもたちがいて、その結果として家はあるけど帰れない、パラサイトになれない人たちが増えて来ます。

宮本先生のお話でほとんどご紹介いただいたんですが、やっぱり学力というのはすごく深刻な問題だと思っています。高卒の学歴ではそれほど大きな意味を持たないんです。先ほど、幾つかの例をお話いただきましたが、私が聞いた話ですが、ある中学の先生が、「せめてこの子が運転免許を取れるようにしてあげたい」とおっしゃるんですね。運転免許を取れないとこの子は社会で仕事に就けないだろうと。その学力をつけられないまま卒業させてしまう中学の先生が非常に悔しそうにおっしゃっていました。

確かにそれはそうですね。高校には何とか入れるという状況が今はありますが、入ったところで、そこで社会生活が営める学力が身に付いていない場合、そういうリアルな問題に加えて、自分に何が起きているかを考えたり、判断したりするための思考の基準となる言葉を持たずに、感覚的に行動化してしまうこともあると思います。転職率や離職率の多さも問題ですが、私たちが仕事を辞めたいと思うことはよくあるわけです。そのときに相談したり、愚痴を言ったりとか、アドバイスを受けていたりして支えられている面が非常に大きいんじゃないかと思うんです。それがなくて、やっぱりすぐ行動化してしまう。学力や関係の中で、何が起きているか、世の中の状況がどうであるかを把握して、とりあえず今は頑張ろうというふうな判断をする生きる知恵みたいなものが形成されていく。ですから、つながりからの排除といいますか、孤立をどうするかということが、子どもたちの将来にわたっての支援ということでは

うと非常に重要ですね。加えて、人とつながりのもちにくい発達障害を抱える子どもへの支援も大きなテーマになると思います。

## 虐待支援について

一方で、虐待支援がどうなっているかということですが、先ほど言いましたように、心理の問題、心の問題化されている部分が非常に強くなっています。近代の家族観では子どもを慈しまないのはおかしいことであって、その人たちを自分たちと同質化したくないという排他的な姿勢がそこにはあるわけですね。同時に、保護者だけじゃなくて行政が悪いということで、特に児童相談所がやり玉に挙げられて、これは支援現場に、すごくプレッシャーになりました。そこでリスクをあぶり出す、ハイリスクな人たちをどれだけ見つけるかが問われるようになり、啓発とか、ネットワークとか、いろいろなことがいわれますが、結果として監視体制的な支援あるいは強制介入を強めていくような支援を求められるようになってきたかなと思います。柔らかく支えていく、長期にわたって支えていくという形での支援体制が十分構築できているのか、というと非常に心許ないです。

特に、山縣先生がおっしゃったように支援が届かない人たちが非常に多くなっています。子育て支援教室などを行政がやっても、来る人は「あなたは大丈夫」という人ばかりです。同じメンバーばかり来るんですね。本当にサポートが必要な人は来ないんです。支援が必要な人たちはつながりということに非常に傷付いていたり、つながっていいことがあまりない人たちだったんですね。このような経験をお持ちの人たちとどうつながったらいいんだろうか。

ただ、先日、児相（児童相談所）の先生にちょっとお話を聞いたときに、虐待をなくすということよりも、しんどくなったときに SOS が出せる人が必要で、それをつくっていくのが大事だとおっしゃっていました。その SOS を出せる人を、世の中にどれだけつくれるか、自分たちで溜めというか、関係をつくれぬ人たちには意図的にこちらが近くにつくっていくというのはすごく大事なことだと思いますが、どうやったらできるんで

しょうか。というのを山縣先生にぜひお伺いしたいなと思います。

このように支援の構造が実は排除的な構造を持ってしまっている。抱擁していくような支援になるためにはどういうふうにしたらいいか、福祉が警察化していったり、司法化していったり、法の執行者としてのソーシャルワークじゃなくて、支えていくような本当の支援というのはどういうふうにつくったらいいか。現状はもしかしたら、親も子も孤立化させてしまっている面があるのではないかというふうに懸念しております。

亀山：ありがとうございます。福祉の現場から2人の先生にコメントしていただきました。山田昌弘先生の最初の議論は経済システムの影響を非常に強調されてきたわけですが、それが家族システムあるいは教育システムにどういうふうに連動して影響を与えていくかというお話に流れてきていると思います。引き続きまして、今度は社会学の方向から教育システムを中心に学校が主に念頭に上がりますが、そこにおける子どもたちですね。少し角度が変わりますが、虐待とつながるいじめの問題をやっておられる野村さんからお願います。

### 社会学からみた「いじめ」

野村：野村洋平と申します。よろしく申し上げます。このような壇上で話せるような知識も学術的な面の積み重ねもあまりないのですが、今回壇上に上げていただきまして、いじめと社会的排除を考えるということで、先生方のお話を聞きまして、私の研究と合わせて考えていることを少しお話ししてみたいと思います。

私自身は、いじめというものをどういうふうに考えているかといいますと、以前からいじめ研究の代表的なものとして、社会学では森田洋司さんと清永賢二さんの『いじめ－教室の戦い』という本の中で用いられた定義がこれまでずっと使われてきております。ある集団の中で、上位の者が下位の者に対して精神的・身体的な暴力を継続的に加えるような行為というふうに解釈されてきました。それで、私自身はこれまでわずかながら積み

上げてきた研究の中で、いじめというものをどういうふうにとらえているかといいますと、上位と下位というのは社会の中におけるある程度の相対的な基準に基づいてなされるわけですが、そのような社会内の基準というもので図れるものに限らず、いじめられる人が社会の中に入ってきたとき、その集団の中にいるときに何かしら力を発揮する。それは、社会の、ある意味では教室の秩序を壊してしまう場合もあるかもしれませんが、教室の中の秩序を過度に象徴しているような人かもしれませんし、そのような何かその人に見られる特徴あるいは力をいじめを行う側が取り立てて、排除をしていく行為というものがいじめなのではないか、と現段階では考えています。

近年ではいじめにおけるいじめ自殺の件数であったり、学校でのいじめがどれぐらいの頻度で起こっているかということが、以前よりも隠されるようになってしまって十分な統計が得られていません。統計としては出ていないんですが、山田昌弘先生の講演にもありましたように、1997年ぐらいから社会意識に大きな変化があったといわれています。文部省が数えているいじめの件数もそのあたりからあいまいになってきています。これは何か関連があるのではないかと。私の今の考えでいきますと、いじめというものは比較的大人の側から見えないことが多く、さらに見えにくくなってきている。そういうような状況で、基本的には子どもたちの中に潜在化してずっと潜伏していく。2006年に社会問題としてまた再びいじめの自殺が現れてきましたが、そのとき亡くなった男の子はみんなに貧乏であるとか、ドロボウであるというようなことを言われて3年ぐらいそれが続いていた。そういうことにもう耐えられなくなったから僕は自殺します、と言って亡くなってしまった。ある意味では、潜在化していたのが、再びまた2006年ごろになって再問題化してきていると思われます。

もう一つ、情報技術が発達してきて、いじめにも新しい形態が出てきているかと思えます。それが、最近になりましてよく言われていますネットいじめです。これに関しては、徐々に研究書等が出てきていますが、私自身もまだ研究をしだした

ところなので、あまり詳しいことは論じられませんが、以前の1980年代から起っているいじめとネットいじめには、ある程度の共通性があるだろうということを今考えています。共通性があるけれども、違う点もあるだろうと思われま。その違う点に関しては、現時点では見通しを持っていないため問題を述べるに留まりますが、今後コミュニケーションなどの問題とともに一緒に考えていきたいと思っています。

もう一つ、格差社会・社会的排除という問題といじめというものを見ていく視点として、新しいいじめというものを見ていくとともに、古いいじめの形態にはどのようなものがあつたのかということにも関心を持って最近調べだしています。

一つは、学校におけるいじめと近いものとして軍隊で行われた1年上の先輩の兵士から、新しく入った新参兵がいじめられるというようないじめです。それが、非常に学校のいじめと近いと思っています。最近興味深い本を読みまして高田里恵子さんという人が『学歴・階級・軍隊』という本を書かれています。そこでの視点は軍隊というところは基本的に平等を志向する組織である。それで、その軍隊に導かれる人がいた当時は、学歴がある程度固まってしまった人たちが多く、単純労働の人とエリートとの二極化が見られる時代です。そういう人たちが一齐に軍隊に集まったときに、今まで社会の中において差別を受けてきた人々が一気に軍隊という組織を通じて平等になってしまった。そこにおいて、ある種の内いじめの行爲が出てきたのではないかと分析をしています。もちろん、高田さんの本はいじめの分析ではありませんで、そういう階級というものと軍隊とがつながっている。そこに見えてくる社会現象があると書かれた本です。私自身は軍隊に導かれていった人たちの時代と合わせて、もしこのまま今の時代の人々が二極化というものに進んでいってしまつて、親からの資産を受け継がない人、受け継げる人が残つていって二極化する。そうなつたときにどういふ力が働くか。それで学校内では二極化した人たちが平等の名の下に集まつたときに、どういふいじめの形態が現れてくるのか、というところを考えていきたいと思つているんです

が、答えはまだ見いだすことができません。

これからさまざまな先生の話聞いて、また私自身もさらに勉強して社会といじめとの関係を探つていきたいと考えています。

## 問題の整理と方向性

亀山：ありがとうございます。一応、4人の先生方にお話をいただきました。これで一巡をして、これからフィードバックしていくんです。これが再帰ということ。リフレクシブということですね。非常に大ざっぱに整理していきますと、社会学という学問は大きな状況から議論を考えていきます。まず、山田先生がおっしゃつたのは現代社会をどう認識するかということなんですね。現代社会学が根底にあります。それは、ギデنزが言つたような再帰的な社会、つまり資本主義が発達して一回ぐるっと回つちやつた。そこで一回ぐるっと回つたときに、今までやってきたことを反省していきます。それで、もう一段階ぐつと上がるんですね。これが再帰、フィードバックをするということ。これが後期資本主義だというふうに言つているわけですね。後期資本主義の時代になると、今まで近代社会であつたいろいろな結びつきが持たなくなつてしまふ。わかりやすい例えを出しますと、船が海に浮かんでいまして、それが、止まつたときにいかりを下ろして安定するわけですね。そのいかりが切られてしまふんですね。つまり、近代社会が出来てきたときには、まだ前近代社会のそういうつながりのようなものを持つている。ところが、一回ぐるっと回つてしまつたときにそのつながり全部切れてしまふ。そうすると、船は波の間に揺れるままです。それが、どういふふうに揺れるかということはどう見当がつかない状況なんですね。不確定性が非常に増えるというふうに言つています。これがリスクということ。リスクが非常に増える。そのリスクが増えてくるので、つまり不確定な要素が増えてくるので、どういふふうに対応していいか分からないという、現代社会をリスク社会として考へるといふことが根底にあるんです。

そうしますと、そういう現代社会が後期資本主義に入りますと、先ほど山田先生が分析されたよ

うに、資本主義の社会システムが二極化していく。わかりやすいのは職業労働が二極化していくわけですね。それで、下にいる人たちは非常に不安な状況に放置されていきます。そうしますと、社会が非常に不安定になるんですね。そういう状況を考えたときに、それがあちこちに現れてくるわけです。つまり、中期資本主義社会ではわりあい安定していた。ところが、後期に入ると非常に不安定化していく。その不安定さの表れがあちこちの領域に出てくるということになります。職業労働もそうだし、それから家族の領域にそれが波及していきます。それから教育システムに波及していきます。

そういうふうに、波及していきますと、その波及先では弱者がどうしても生み出されてしまう。その弱者はさらにその不安定化の中でより排除を、——排除とは大げさだというふうに言えるかもしれませんが、ソーシャル・エクスクルーションとギデンズは言っていますが——そういうふうな弱者をもっと不利な立場に追い込んでいく悪循環のようなものが起きてきます。そういうふうな状況の中を、われわれは生きているわけです。誰もが不安になる。リスク社会の典型のようなものですから何が起きるか分からない。だから先ほどの山懸先生のお話にもありましたように、社会の上層部も非常に不安に思っているということもよく分かります。

こういうふうに、社会学は考えます。社会学のアプローチを一番端に置いて、もう一方の端に福祉のアプローチを置きますと、先ほどのお二人の先生の話をお聞きになっても分かるように、非常に現場から発想されていきます。現場で対応しなければならぬわけですね。問題が起きていますから、それを解決しなければいけない。そういうふうな実践論から入ります。実践論から入っていくのに対して、もう一方は大局から入っていきます。こうした軸の真ん中で両者が状況論を展開せざるを得ないわけですね。つまり、社会学においても、大局から見ていくけども現代の状況認識をどうとらえるかという問題になります。同じようにして今度は逆の方向から実践をやっている人たちも、今どういう状況にあるのかということ考

えざるを得ません。つまり左右両方から現代をどうとらえるかということをやっているわけですね。そこに交差点が僕はあるというふうに見ているわけです。

それが現場をめぐる問題として出てきているわけです。そういうふうな認識の在り方は、この山田昌弘先生の発表を始め、4人の先生方においてもほぼ共通しているように思います。

以下、一巡しましたので、焦点をそこに絞って議論を進めていきたいと思っております。まず、そのフィードバックされた中で、山田先生は午前中にお話をなさったんですが、先ほどの4人の先生の方のコメントを聞かれて、どういうふうに自分の議論を進められるかということ、ちょっとお話いただければと思うんです。お気づきになった点で結構です。

### 問題提起への応答

山田：コメントを含めまして、いろいろ私も参考になる話が多くて勉強になりました。

やっぱり解決はなかなか難しいなというふうにするところが多かったです。例えば宮本先生が失業率はもちろん高校中退の人のほうが高いとあるというのは事実としてあると思うんですが、問題は、じゃあ高校中退しなければ全員が正社員になれていたかということ、またそれも難しい問題になるわけで。今度は最低ラインが大学中退になっちゃったわということになりかねません。いわゆる学歴インフレ効果というのがあるので……。問題は、ですからもちろん宮本先生は十分に分かっていらっしゃることなんですけども、そういう話をする、じゃあ、みんなに高校を卒業させれば問題は解決するのか、ということが問題の難しいところかなと思っています。

あと山懸先生のお話で、もちろん母子家庭の問題もいろいろあるんですが、それもやっぱり現代的貧困の問題というのが、もちろん母子家庭は昔から苦しかったというのは確かなんですが、今、二重の苦しさとして表れていると思っています。それは何かというと、昔は片働きというか男性が養うような状況が標準としてあったわけです。だから母子家庭の人には、母親が何とか働けるよう



にすれば OK というのがありました。今、共働きが標準になり始めていると、母子家庭だと1人で共働きはできませんから、相対的収入は低くなるというのは、それはよく考えたら当たり前ですよ。昔は男が働いて1人分の収入で養っていた。でも、母子家庭の場合は男性がいないので、生活保護もしくは母親が働けるようにすれば何とか生活できるようになっていた。だけれども今は夫婦二人共働きが標準になっているところで、母子家庭というのが出現してしまうと、標準的に働いても共働きの半分しか稼げないという状況になってしまうわけですよ。なのに、政策はもっと働けとか母子加算を廃止するというふうに逆方向を向いているというのもまた不思議なことが起きているな、というのは私が一つ感じているところです。

あと、上の人は不安がっていると言いましたが、確かに、私も良いことか悪いことかが分からないんですが、私の大学でもそうなんですけども、できる上のほうの若者がどんどん保守的になっている。つまり公務員を目指すとか、親から公務員になれと言われたとか、ますます安定的なものを能力的に高い人が求めているんですよ。これは、能力的に高い人は安定的なものを求めて安定した職について、逆に本当は安定的なものが必要な、下の、いわゆる学力があまり高くない人がリスクをとらされている。つまりリスク論に乗って言えば、リスク的な社会の中で本来は学歴や能力が高い人はどんどんリスクを取っていろんなところで活躍してもらいたんだけど、そういう人は保守化してサラリーマン、公務員になってしまうわけです。別に悪いってわけじゃないですよ。一方で、安定した職場が必要な、学歴等が低い人というのは、自由競争で勝手にやれといってリスクの高い正規雇用を追い出される。やっぱりこれは日本の社会全体にとって良くないのかなという気がしているんです。

でも、個人の行動をとやかく言えませんので、全体ではそうでも、個々人から見れば一番利益の出る行動をするのは当然ですから、それは、平等主義教育を主張する大学、教育学の教授が自分の子どもをいい私立に入れちゃうというのと一緒

で、なかなかね、個々人の行動を批判できないんですが、それを何とか社会で、全体でどういふのかなというのの一つ思いました。

山田容先生のほうは、この最後の支援のところがどうなのかなと。さっき聞いたところでは、支援が不必要な人が来るというやつですよ。これは私も男女共同参画の講演で、来ている人は私の講演を聴く必要はありません、と言うのと一緒に、来てもらいたい男女平等や共同参画が分かっている人は来てくれるけども、最も知ってもらいたい人には来てもらえないというような状況があるのです。

難しいのは自主的に支援、自主的に申し出たもので支援というのをしていこうとすると、そうやって本当に必要な人は来ない。だけれども、いわゆる出てこない人を無理やり引っ張り出そうとすると、いわゆる強制・監視というのが必要になってしまう。この大きなジレンマをどうするか。つまり昔は何らかの集団の、地域なり親族、親せきも一緒ですけど親族なり、そういう中間集団の中で落ちこぼれそうな人を救い出すというのが行われていたわけですけども、今は本当に支援が必要な人はバラバラになっちゃっていますので、バラバラになって出て来ない人を支援する場に引っ張り出すための強制とか監視とかというのを、どう評価するのかということにきているのかなと思っております。

あと、野村さんの中では、最後に軍隊という話が出てきました。最近、赤木智弘さんという、「『丸山眞男』をひっぱたきたい」という論文を書いた人がいます。東大の助教授だった丸山眞男が軍隊に入れられたら、農村から出てきた小学校卒の先輩たちにひっぱたかれた、という記事を見て、フリーター代表たる赤木さんは、「いや、戦争になればそういう逆転が起きるから、戦争を起こしたほうがいい。そういう平等のほうがいい」というふうに主張しました。一つひっぱたいたら、一時的な憂さ晴らしにはなりますけれども、構造的問題は何にも解決していないわけですよ。だから逆に言えば憂さ晴らしだけですまされるようになる、これは野村さん自身の発言であるというわけではなくて、そういう風潮が押し出て

いるとしたら、まずいかな、という気がします。

### さらなる議論に向けて

亀山：どうもありがとうございました。

これで二巡目に入っていきたいと思うんですけども、やっぱり問題を絞っていかないと分散してしまうので、取りあえずここで選定作業を行ってしまいます。山田先生が、こういう格差問題は社会システム全体が変わってしまっているの、それを変えろというわけにはなかなかいかない。しかし、そこから出てくる結果については、われわれはやっぱりそれなりの対応を考えていかなきゃいけないだろう、ということを経験的におっしゃったわけです。そのところにかかわることなんです、福祉の先生方が、くしくもみな社会関係がバラバラになってきている。孤立化しているとおっしゃっているわけですね。現状においても、それから現場のいろんな状況を見ていまして、いじめられて、あるいは虐待されているにしても、相談できないとか。そういうふうな状況、そこで現場で皆さんは実際にお働きになっているわけです。

先ほど山田先生がおっしゃったように、中間集団、つまり地域とか家族親族を含めたそういう中間的な集団—個人と国家の間にある集団を中間集団、と大ざっぱに言うんですが—そこら辺が後期資本主義に入りましてバラバラになってきてしまうんですね。つまり先ほどの例で言いますと、船を引き留めているいかりの綱が、1本1本切られていくわけです。そうしますと船はどんどん漂いますからどこへ行くのか分からなくなるという状況が今起きてきているわけですね。そういうふうに虐待を、あるいはいじめをやっぱり防いでいくには、そのところをどう考えるか、あるいはそこにどう介入するのかという問題が出てくるんです。先ほど宮本先生が中卒の例をお出しになって、この方たちもやはり友達とか既存の職場が持てないということもつながって、孤立するのではないかというふうに思うんですが、そのあたりでどうでしょうか。

### 自立支援の現状

宮本：いろいろな例を挙げて、中間集団的な、あるいは孤立している人と人とをつなげていくというような試みが、行われているんです。事例でご紹介させていただきますと、2004年に厚生労働省の若者無業者施策ということで、若者自立塾というのが始まったんですね。全国で30か所で、ニート状態の若者が3ヶ月合宿をしながら、そこで生活を立て直しながら、仕事に就くための支援機関です。厚生労働省の施策なものですから、仕事に就けるといってるところまで自立支援するというところで始まったものです。そこへ入ってくる人を集めるだけでも相当苦勞して、ずっと定員割れ状態なんです、何をやる必要があるのかということに関しては、自立塾が始まったことによって見えてきたことがあるように思うのです。

例えば、自立塾に入る人たちの相当程度が、長期に引きこもっていた方々で、年齢はもう25歳を過ぎている人が圧倒的多数です。引きこもっていたということは、親の家にいたということで、しかもその中の3割から半分ぐらいは、学校時代にもう既に長期不登校、あるいは中退というような経験をしています。大学卒業まで何でもなくて、正社員で就職して、そこからつまずいて引きこもったというケースもあるんです。とにかくそういう形で放置をしておけば、完全につながりは切れてしまう状態にありますし、しかも家の中に隠れているわけだから、その所在を外から突き止めることさえできないというのが今の状況です。

そこへ入ってきた方たちというのは、親が何とかしようと大変な努力をしてうまく引っ張り出せたか、あるいは支援団体がその家に訪問して、そこから自立塾に入所するようになったというようなそんなことです。3ヶ月間の中で何をやって立ち直っていくかということ、まず第1に生活のリズムの回復です。生活のリズムは、朝明るくなったら起きる、食事はちゃんと定時に食べる、それから体を動かす、それから人と話をする、というようなことなんです、社会から孤立していくということは、今申し上げたようなことが全部駄目に

なっていく状態と言っていいと思うんです。発見されたころには、年齢的には一番元気な健康な時代であるはずなのに、体力がなく、体が動かないくらいまで衰退しているんですよ。

1ヶ月2ヶ月の中でだんだん人との関係を、限定付きですが、取り戻していくというようなことをやって、社会体験、職場体験などの活動を通して、自立の道を探っていきます。厚生労働省の基準としては、卒業後、半年の間に、7割の方が何らかのの仕事に就くこととしています。3ヶ月で終了というのは、これはもう全くお役所的発想でありまして、3ヶ月以上は税金を使えないということで3ヶ月ということなんです。ところが実際に支援をしてみると、自立するためには3ヶ月では解決しない。そこで支援団体が編み出した方法は何かというと、自立塾の3ヶ月が終わった後、そこに住まいがありますので、そこか、あるいは大阪のある団体なんかは近くの老朽化した公営住宅を自治体から無料で貸してもらって、そこに次のステップということで3人くらいで住まうようにしています。そうすれば家賃がかからない。それから3人で住んでいるので孤立しない。親の家に入って帰ってしまったら、元の木阿弥なんですよ。親の家に帰るのではなく、自立をさらに一歩進めるということをやっています。

でも社会的な関係をつくりにくい人たちのので、放置しておくとその住宅の中でまた引きこもるわけですよ。なので、日常的に自立塾に顔を出すように誘っています。公営住宅からアルバイトに通う。そうすると、毎日はずらいんですよ。ものすごくつらい。放置しておけば仕事を辞めてしまうということなんだけど、仕事が終わったら自立塾に寄る。そこへ行くとスタッフがいて声を掛けてくれる。ということをやって、それが終わったら今度はアパートを自分で借りるとか、そういうようなステップを歩むよう、支援しているのです。

これは、孤立した人々がどういう形で社会へ復帰していくか、ということの一つの方法ではないのかという感じがします。いろんな国を回ってみると、似たり寄ったりの方法を取っていて、重要なのはケア付きの住まいと、それから身の丈に合

った仕事。それから、必要に応じて福祉的な給付、それを自立の度合いが高まれば少しずつ給付を減らし、自分で稼ぐようにしていくということです。自立するために必要なお金というのはかなりのレベルですよ。それを、本当に稼ぐところまでいけるかどうかという問題があるわけです。そういう点で、働いて得るお金と、追加的な給付、それから非常に安い、安心のある住まいというようなものがセットになって自立というものが可能になるのではないかという感じがします。

そういう点で言うと、フリーターが結婚できないか家庭を持ってないとか、そういう問題があるんだけれども、現在の労働市場の状況の中で、雇用を通した自立という線を進めていくと、雇用によって完全に自立できない人たちが一定の割合出てくる状況にあります。その人たちは複合的なハンディを持っている人たちだと思うんですね。そういう意味で、賃金とプラスアルファという組み合わせの中で、生活ができるようになることを考えていかざるを得ないというのが、今の若者支援現場から出てきた発想であります。日本の家族支援、それから家族手当というのは、先進国の中で最も低い部類に入るわけですが、たとえ給料が非常に低くとも、夫婦で働き、かつ子どもの養育手当、子どもの教育費、あるいは住宅というような部分が付加的に給付されれば、身の丈に合った生活は可能ではないか。そのあたりの、社会保障制度を含めた仕組みを考えていく必要があるのではないのか、という感じがしております。

亀山：ありがとうございます。

そういうバラバラになっていく、中間集団レベルの環境をどう修復あるいは新たにつくるかという問題もあるわけです。先ほど自立塾の件を紹介いただいたんですけども、山田昌弘先生の図式でいけば、オールドエコノミーの時代からニューエコノミーの時代にわれわれの社会は展開していったわけです。オールドエコノミーの時代は、そういう生活に困った人たちは国家が面倒をみた。これが福祉国家です。ところがニューエコノミーの時代になると、そういう人が非常にたくさん出てくるので、とても国がみる経済的な余裕がない。

国自身が疲弊してきていますので、とても余裕がないわけですね。そうしますと、先ほどの自立塾もそうですが、どのような組織が、あるいはどのような人たちがそういう社会関係のレベルで修復なり新たな形を模索していくかということが問われているというように思います。

山縣先生と、山田容先生は、そういう中で相談所とか、母子家庭の支援とかを実際にやってこられているわけですが、国とか地方自治体はもう限界がある。すると、そこをどうやって支援していくか、セーフティーネットと言ってもいいんですけども、そういうものをつくっていく可能性があるのか。あるいは今現在進んでいるのかという辺をちょっとお話をいただけないかと思います。

### 排除意識と“ちえん”

山縣：社会福祉の全体的提案を宮本先生にしてもらいましたので、私のほうは、その入り口をもうちょっと話をさせていただきたいと思います。

社会的排除の問題ですね。一般に構造的な問題として語りがちですが、きょうもそういう形で示してきましたけども、一方では意識の問題だと思うんですね。構造的な問題というのは、政策的には例えばトップダウンである程度対応できる可能性はある。けども、意識の問題というのは、政策的には非常に対応しにくいし、トップダウンではましてや対応できないというか、そういう限界があると思っています。そこが今の福祉がどうかかわっていくのか、支援論としてどうかかわっていくのかということにも関係しているのではないかと個人的には思っています。

その意識の問題で言いますと、積極的な排除主義論者の人たちはさておきまして、結果的に排除意識になっている人たちが結構いらっしゃる地域というか町があるということなんですよね。それは排除されたくないという意識が、一方で排除されている層に対する差別意識を私ははらんでいるのではないかと思っています。本人たちが意識されているかどうかは別にして、潜在的に排除される層に陥りたくないというものというのは、やっぱり差別感が少し入っているのではないかなと思

うんですね。

もう一つはそれを、さっきの野村さんのいじめとの関係でいうと、いじめられている子、については社会的関心が高く、その子たちに手を差し伸べないといけないというのはみんなが分かっている。しかし、もう一つ、このいじめ問題にある私を感じている現象というのは、いじられ方を演じている子どもたち。いじられることで、その関係を保っている子どもたちがいるわけなんです。その子どもたちというのは、見かけ上は苦痛を表しませんから、社会はあれで構わないでいるというふうになってしまう。そこに対して手をかけようとはなかなか感じないし、本人たちもそれをまた言ってこない。ところが、その子どもたちというのも、結局は、結果的に排除されるということを演じてしまっているとなっているのではないかと思っています。

三つ目のお話は、社会を作る仲間ということですよ。

先ほどの亀山先生の話の、地域とか中間集団という話がありました。私は、人間は三つの縁で生きています。またしょうもない話なんですけど、笑わないでください。「ちえん」と読めそうな、辞書にはそう読めるとは書いてないかもしれないけれども、「ちえん」と「えん」は縁です。読めそうな「ち」という漢字三つぐらい考えてください。一つはね、おそらく皆さん方最初に思い浮かばれるのが、土地の縁、地域の縁のことだと思います。これは辞書にそのまま出てきます。それからもう一つは、かなりひねって考えると血縁ということではないかと思えます。血の縁ですね。辞書的には血縁とは呼びませんけども、読もうと思えば“ちえん”。私たちは、その地縁と血縁という、その二つの「ちえん」の中で生きていくという説明を長くされてきたような気がするんですけども、今、例えば子育て世代を見ていると、あるいは青少年世代を見ていると、地域の縁というのは逃れることができる。血縁は逃れようがないが、地縁は選択できるというふうになり、どうもなっている。地域の縁を忌避する、忌み嫌う層が出てきて、昔ながらの付き合いについての抵抗感。そういう人たちがたどり着い

た「ちえん」が何かというと、知り合いの縁ではないかと。知る縁と書いてあります。仲間ですね。これが先ほどの亀山先生の提示に対する私なりの答えです。

今、若い人は、特に子育て層とか青年層で言うと、仲間は結構持っているんです。ただそれが小さいんです。社会関係の取り方が下手だという山田容さんの話があったんですけども、嫌いな人とは付き合わない社会です。逆に好きな人とは非常に深く付き合いをする、特定の人と交際するということの繰り返しをやっているんです。その「ちえん」、知り合いの縁を、土地の縁ともう一回結び付けたコミュニティー。コミュニティーという英語の中にある、二つの意味をもう一回実現するということができるのではないかと私は信じてこの福祉の仕事をしている。

私自身も子育て支援活動として、地域の人たちと「みなくるハウス」という拠点を作っています。年間8,000人ぐらいの人たちが利用しています。要はそこを使って、その地域のつながりをつくっています。高齢者もいます。当然子どもたちもいます。いろんな人たちが会合の中で、新しいコミュニティーが出来上がっているのではないかと今信じています。

もう一回、知り合いの縁と地域の縁、二つの縁を結ばないといけないのではないかと、近づけないといけないのではないかと。それを何で結ぼうかと考えて思い出したのがチェーン。知縁と地縁をチェーンで結ぶんですね。

亀山：くしくもおじさんギャグがありました。そういうちょっと明るくなったところで、その議論を受けて、容先生は支援が逆に抑圧になるということですね。その根幹に社会的なつながりが持てない人たちがたくさん出てきているということをおっしゃっているわけです。山縣先生の議論はいかがでしょう。

### 学校の活用

山田（容）：そうですね。山縣先生がおっしゃったように、本当につながるの持ち方が多様化しているというふうに考えたほうがいいと思います。

しかし、例えば、行政の先ほど言った子育て支援の講習会とか研修とかは、平日の2時からだったりするんです。その時間に家にいて、子どもを預けてこられる人なんていうのは限られているんですよ。もっと、例えば夜とか休日とかに、本当に行ける時間に設定すればいいわけですが、その設定がないし、しかも設定したとしても疲れ切っていて、動いていけない人もいます。だったら、例えばインターネットでもいいと思いますし、そういういろんな形での支え方を選択できるようにすればいいと思う。そのためには、NPOとかにお金を付託してやってもらうというのが、重要なことだと思います。そういう多様性を持った、これでやろうというのではなくて、これもあるよという形です。

もう一つは学校がどう役割を果たすかというのが非常に気になっています。山田昌弘先生のレジメの中で『希望の国のエクソダス』の冒頭の部分があって、これは非常に印象的な言葉ですが、希望があったときの学校教育と、希望がなくなってしまったときの学校教育が同じことをやっていて良いのか。すごく大きな問いかけだと思うんです。

宮本先生のお話にもありましたけれども、今学校が子どもに、どういう力を形成させるのかということ。それともう一つは学校というのは、取りあえず子どもと出会える、社会的に出会える可能性を持っているところですが、これを生かしてどのような役割をするか。現状は、だんだん学校が福祉化しているという感じですね。これは象徴的ですけども、スクールソーシャルワーカーの導入は、教育現場でありながら福祉機能を学校が持ちだしているわけですね。それは、子どもを支えていく場としてコミュニティーセンターでもあるし、福祉センターでもあるし、あるいは親のカウンセリング機関でもあったりするわけですが、それを先生だけでやるのは、極めて難しいだろうと思います。ではスクールソーシャルワーカーがやってください、となりますけど、スクールソーシャルワーカーが果たしてそこまでできるような状態ではありません。

ですから、これからの地域の中の一つの縁とし

て、そういう役割を期待される学校を地域がどう支えられるかということが極めて重要な問題だと思っております。

以上です。

亀山：ありがとうございます。

いじめの問題とつなげて、あえて言いますけれども、学級のいじめを調べたことがありますけれども、先ほど野村さんの言った森田さんたちの調査なんかによると、いじめが起きていることはみんな知っていても誰も止められないという。なぜかという、止めると自分が今度はターゲットにされるという状況があるわけですね。つまり、それはバラバラになっているということです。だから、瞬間的にどこかとちょっとつながってターゲットにされ、また違うところにつながってターゲットにされるという、そういう非常に流動的なバラバラ化傾向が進んでいるわけですね。

そういう中で、そういういじめをどうやって阻止していくかという問題が出てくるんです。いじめの阻止の問題と、それからこういう格差社会の中で社会的に排除されていくことをどうやってチェックしていくかという問題は、ある意味で平行していると思うんですね。そういう意味において、ちょっとその辺で人と人とのつながりの問題も念頭に置きながら、ちょっと議論をここで出していただきたいと思うんです。皆さんいかがでしょう。

### 苦悩の共有

野村：私自身は事例とかあまり細かいところまで入り込んでまだ研究できていないので、それこそ希望というか、夢みたいな話になるかもしれません。

一つだけ最後に付け加えさせていただきたいのは、私自身もそうだったのですが、いじめられた経験ということを生かして何か共同体もしくは組織をつくれなにかということが問題の最終的な解決の手段になるのではないかなと思っています。それは、排除を受けたという経験は、社会内の経験にとどまらず、絶体的な孤独といいますか、非常に本人の生そのものにかかわる深い問題

だと考えています。

虐待の問題もそうですし、いじめの問題もそうですが、いじめられた状況、いじめが発生しやすい状況ができてしまったときに、以前に自分がかかえた負の記憶を消そうとして、虐待の行為におよぶとか、いじめの行為におよぶというような連鎖ではなくて、自分の受けた痛み、傷というものを直しながら、そういう状況をどう乗り越えていくか考える方向があるのではないかと。苦悩をかかえた子どもがいたときに、そういう子どもにどう自分の経験から対面してあげられるか。そのような苦しみを通しての共同体というところに行き着くことができれば、ある程度解決につながるのではないかと。一つの方針が見えてくるのではないかと、と考えているんですけれども、これは実際にはなかなか困難な作業だと思います。

私自身の希望として、ちょっと語らせていただきました。

亀山：苦悩を共有するという共同体なんですけども、これは理念型として、つまり理想的な形態としてあり得る形だと思いますね。普通、共同体という喜びの共同体とか、そういうふうには想像するわけなんですけども、理論的な視点からいくと、苦悩を共有する、そういうふうな共同体の発想というのができるんだろうと思います。もちろん、これは現実に現場でやっておられる方たちはそういうことを実践されている可能性もあるわけですね。一つの可能性として考える価値はあると思っています。

ということで、二巡を終わったんですけども、あと5分ぐらい残っております。会場のほうで何か質問なり議論を出したいという方がおられれば、受け付けたいと思うんですが、いかがでしょうか。

### 会場からの発言

会場：本日はどうも貴重な機会を与えていただきましてありがとうございました。

日ごろマスコミを通じまして社会がひずんでいることは感じていたんですけども、これほどひずんでいるとは思いませんでした。前期資本主義か

ら後期資本主義社会、このように後期ということ、分からなくもないんですが、きょう講演をお聞きした中で、ぜひともお尋ねしたいのは、大局的な見地からの社会学から、末端の福祉の現場のお話を聞くことができたんですけども、今の問題を解決するために、対処療法的なこともあると思いますが、根本治療をしないと結局問題の解決につながらないと僕は思います。

施策というのもあるんでしょうか。例えば、これは自治体とか一国の政府とかでは、もう解決できない問題ではないかときょう思いました。ちょっと素人の考えですけど、今の不景気に対する多国間協議ではないですけども、それとか、国連が中心になるとか、そういうことが必要ではないかという気がしてきたんです。その辺の根本治療をどうしたらいいのか、ちょっと教えてください。

亀山：大きな問題が出されてきたんですけども、問題提起の責任者である山田昌弘先生にお話を聞かせていただきたいと思います。

山田：そうですね。世界経済の様子を見てみると、もう一國でコントロールをすることは不可能だけれども、次の秩序が見えないので、5年、10年先がなかなか見えてこないのかなということが言えると思います。

ただ、日本はその点多少有利だというのは、あまり人が逃げ出さない社会ですので、社会保障等は日本一國だけで大きく組み替えれば何とかなるかもしれないというふうに思っています。欧米だと本当に一つの国が、国で何か変わったことをやると、すぐ逃げ出しちゃったり、入ってきちゃったりするので大変なんですけど、まだその点は日本は逃げ出さない、逃げ出せないという意味では日本国内でできることはあると思います。

それと、先ほど山縣先生の、知と地をチェーンでつながって、そのチェーンが大切だと思うのは、チェーンは鎖ですから、つまりある程度の強制力を持って、強い人に我慢してもらわなければいけないというところが実はあるんですよ。はっきり言えば、自由に放任すれば、強い人は強い人で付き合っちゃうんですよ。自由に知り合いの

人と新しい共同体をつくりましょうねといった結果、何が起きたかという、インテリ層はインテリ層だけで付き合って、というすごい強者の共同体ができてしまって、助けてもらう人だけ放置されて、助けてもらいたい人だけ放置されて一緒にいても、はっきり言って共同体にはならないんですよ。だから、そこら辺をうまくさせるシステムが必要だとは思っています。

亀山：ありがとうございます。時間がないので取りあえずこういう形で終わらせて……。

もう1人の方、どうぞ。

小椋：この龍谷大学社会学部におります小椋と申します。専門はスポーツ社会学という分野なんですけど。お話の中でスポーツの話は山縣先生が、一発逆転があるかないかというお話のところから出てきて、結論はないんだというお話だったんですけど、私は必ずしもそうは思わないんですね。というのは、一発逆転があるからスポーツは面白いという立場もあるんですね。

社会学を語ると暗くなるという話があるんですけど、午前中もありましたが、スポーツ社会学は必ずしも暗くならないで、というのはもう一つの足にあるんですね。社会学と同時にスポーツも踏んでいるというか、両足があるんですね。きょうのお話なんかでも、排除の子ども、若者なんですけども、しんどい思いをしているその子どもたち、若者が、唯一と言ったら言い過ぎなんですけども、希望を持ってやれる領域にスポーツというのがあるんです。しんどい思いをしているが、スポーツは、学校に行っても勉強は面白くないけど、スポーツ、部活があるから学校に行くというケースもある。そのスポーツというのは、ある種、希望なんです。希望社会。勉強での希望はなくてもある種の希望を持つ。

私の意見を、結論みたいになっちゃうんですけども、そのスポーツで逆にまた虐待される、部活での体罰みたいなので、非常に排除されるというケースもありますし、それから同時にそこに希望を持ってなお続けるといったケースもあるんですよ。その希望を持てる条件に、フェアな競争、オ

能・実力がどういうふうにも認められて、しかもフェアな競争があるから努力もできる。フェアネスというのが非常に重要だと思うんです。

ところが、2世とか世襲という話になるとフェアネスということが欠けていくから、競争しているのか、談合しているのか分からないみたいなことになるんですね。スポーツには、もし希望を残す、あるいは可能性として希望を残すとすれば、フェアな競争ということは、ルールということになるんですが、すごく重要になっているんですね。

スポーツ社会をつまらなくしている2世、それから世襲の問題、議員さんの問題、学者の問題も出ましたけども、世襲みたいな、あるいはフェアネスを変えてしまうと、どんどん努力が報われなくなっていく。そういうこともスポーツと似ていて、同時に排除もあります。その排除された人が希望を持っている分野としてスポーツというのがあるようにも思います。私がただ勝手な個人的な感想を述べさせていただきました。

亀山：ありがとうございます。

### 議論のまとめと方向性

亀山：時間がちょっと過ぎましたけれども、ほちほちまとめに入っていきたいというふうに思います。きょうは、最初のところで学部長、および総合司会の古賀先生がおっしゃいましたけれども、龍谷大学社会学部ができて20周年を迎えました。私はここへ来て19年になりますけれども、だいたいその経緯に少し触れていいますと、社会学部には当初から、社会学系と福祉系がずっとあるわけです。その両者はそれぞれ別々に学問的な業績を積んできました。ところが残念なことに、その両者の間にほとんど対話がなかったんですね。どういう事情なのか、学問的方法が違うからなのか、それともお互いに領域を侵さないという、これはフェアなのかどうかは分かりませんが、そういう暗黙の了解があったのか分かりませんが、そこがなかったんですね。それで、20周年を迎えるに当たって、これではいけないんじゃないか。

つまり、あちこちの大学がいろいろな特色を出すようにしていかないと生き延びていけないという状況に、サバイバルな状態になっています。これは良くも悪くもそういう状況にあるわけです。そういう中で少しでも希望を持てる大学にしていけないと、それこそ底辺になってしまうので、何とかそこをやっ払いこうじゃないかということが、今回話し合われました。

そのための一つの方策として、やはり両者の対話を始めよう。今までやってこられた、あるいはそれぞれの先生方がたくさんおられるわけですが、そこに橋渡しができる基盤を、まずつくっていくことが一番重要だろうということで、今回のこういうシンポジウムを企画させていただきました。その折りに、山田先生が幾つかご本をお書きになっていて、僕は『希望格差社会』という文庫になった本は非常にいい本だと思います。今、学生にゼミで使って読んでもらっています。そういうことを、やっぱり社会のそういう新しい形が見えてきた段階の中で、いろんな問題が起きている。その問題は、社会学者はこういうふうに見ていて、それに対して福祉の人たちは、やはり現場でどういうふう日々対応されているかということがあるわけですね。そこに対話をまずしようということで、今日は山田先生にお忙しい中来ていただいて、お話をさせていただきました。そして、それを巡って、福祉のお二人の先生に、社会学のお二人の先生が、それぞれ自分のやっておられる研究をベースにしながらコメントをしていただくという形で、まずここで対話を始めました。

そこで何を確認されたのか、ということが問われるんですが、まず確認したいのは、対話を始めたということです。そしてこの対話を、これをベースにして、2年なり3年なり続けていって、それを、今までの研究成果をそこに吸収できれば吸収していくという形で、一つの共同研究センターをつくりたいと考えています。そしてその研究センターをベースにして、龍谷大学社会学部がやってきているのはこういうことなんだ、ということを外に向けて情報発信していく。それは何も研究だけではなくて、教育のほうにも反映し、新しい授業をつくったり講義をつくったりしていき



いているわけですね。そのとっかかりを始めようということがあったわけで、これができたと僕は思っています。

きょうの議論をお聞きになって、ではその共通基盤は何かといいますと、中期近代社会から後期近代社会へ変わっていったという共通認識です。その後期近代社会は非常に不安定な社会になる。その不安定さがあちこちに出てくるだろう。それは社会問題化していくんだ。その解決ということは、そう簡単にできることではないんだ。昨日、五木寛之先生が「資本主義がのたうち回っている」というふうにおっしゃいましたね。その、のたうち回る資本主義は、やはり次の新しい時代を、やっぱりどこかで見せるだろうとおっしゃっていました。その新しい社会は、全く見えていませんが、どこかで垣間見ていく以外にないんです。その間は非常に暗い、こういうふうなたそがれのような時代が続くだろう、とおっしゃっていました。その中で多くの人たちが希望をなくしてうつ状態になっていたりするんですが、そういうふうにならずに暗い時代を、ある意味で希望を持ちながら生きていくということが知恵として要求されるだろうとおっしゃっていました。つまり、暗い中にどうやって光を見つけるかという、そういうことになるわけですね。

そういう意味において、光を見つけていくには、まず自分たちはどこにいるのか、どういう状況にわれわれは放置されているのか、これを認識する必要がまずあると思います。つまり、自分が何に縛られているかを認識できなければ、その鎖をほどくことはできません。ですから、まずどういう状況に今あるのか。それを社会学からどういうふうに、例えばとらえるのか。福祉からどうとらえるのかという状況認識を始めたということになります。本日は、そういう状況認識をお互いに出し合って対話をした、ということになろうかと思っています。

新しい時代は本当にいつ来るのか分かりませんが、しかし、うつにならずに、あるいは絶望せずに、このたそがれ時を生きていこうということ、その中でやっぱり学問というのは希望の光を持っているというを確認できたと思っておりま

す。これは私の勝手な希望的観測かもしれませんが。しかし、本日こうやってお運びいただいた皆さま方に、少しでもそういう光が少しはあるぞ、ということを確認していただければ、これにすぐることはありません。

ということで、本日は長々とこういう形でお付き合いくださいませありがとうございます。講師の先生方、山田先生、どうもありがとうございました。どうぞ拍手で。

これにて本日の記念シンポジウムを終えたいと思います。

どうもありがとうございました。

司会：ありがとうございました。では、パネリストの先生方に今一度盛大な拍手をお願いいたします。

最後に、主催者を代表いたしまして、龍谷大学社会学部研究科長の友信勝よりごあいさつを申し上げます。

大友：皆さんきょうは午前中からこの時間まで熱心にご参加いただきまして、大変ありがとうございました。

今、このシンポジウムのまとめについては亀山先生がおまとめになったとおりです。改めて学問というのは、夢と希望をどのように構築していくか、ということにかかわる方法と手続きのように思っております。きょうはこの状況認識の共有ということのお話もありましたけれども、十分その目的を達成し、これからどのように私どもが歩むべきかという方向についても、多くの示唆をいただいたように思っております。20周年というのは、一つの経過ですし、これからどこに向かってどのように取り組んでいくかということが、まさにこういう節目の時代にこそ問われているのであろう、とこのように考えております。

格差・貧困問題は時代のテーマですが、これはやはりグローバリゼーションと規制緩和の中で大きくは生じた問題だと認識をしております。格差というのは相対的なものであって、貧困というのはどちらかというと絶対的なものですが、貧困というのは経済的に単に困難だということだけでは

なくて、きょうもいっぱいお話がありました。経済的に困難だけではなくて、さまざまな社会関係から孤立していくということを通して、もう一つは長い貧困状態が続きますと、自分で自分に駄目な人間というレッテルを張るという、社会的孤立や生活意欲の減退ということになっていきますと、貧困は確実に世代間連鎖をしていきます。

それに対して、今の社会的な政策がどうなっているか。ワークフェア、あるいは有期保護、そういうことを通して、モラルハザードを追求し、懲罰的な方法で対応しようとしています。排除と引き締め、この方向から夢と希望を語ることはできませんし構築できない。

今、例えば反貧困のネットワークが全国に広がりを見せておりますが、これはいわゆる多重債務の問題に取り組む方々と、ホームレスの問題、あるいは貧困状態にある方々の雇用や労働の自立支援をどうするかという方々が、ともに当事者、障害を持っている方々、こういう方々を中核に置きながら、弁護士や司法書士や多くの関係する方々がともに取り組みながら、今、大きく輪を発展させているからこそ、国民的な運動の広がりを見せてきているんだと思います。

問題がどんなに深刻でも、社会政策が安易に取り上げることはありません。しかし国民の方々の理解を得て、多くの社会的な了承を取り付けて、そして私どもがそのようなものを背に受けて、これからの進む方向を提示し、そこにまた学問が筋道をつけていくというネットワークを広範に組織

していくことができれば、大学としてもいささかの役割を果たすことができますし、社会的に大きな役割を果たしながら、これからまた私どもが地域の中で必要とされ、社会の中に求められる学問を構築しながら、この龍谷大学の社会学部を一層これを契機に発展させていきたいと、このように考えております。

これからもいろいろお世話になることが多いですし、いろいろご支援を得ることがたくさんありますが、どうかよろしくお願ひしたいと思っております。

どうも皆さんありがとうございました。改めてまたシンポジストの方々にもお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

司会：ありがとうございました。

大友研究科長にありましたように、私どもは本日からまた改めてこのような催し物を発信したい、あるいはいろいろな方と協働してまいりたいと思っています。取りあえず本日の基調講演とシンポジウムについては何らかの形で印刷、発行する予定にしております。そのほか、来年度にかけてまた新たな準備にかかっていくことにしております。皆様方もご協力、ご賛同いただけたらと思っています。

本日はどうもありがとうございました。これをもちまして20周年記念のシンポジウムを終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

## あとがき

### 20周年記念事業委員会 委員長 古賀 和則

社会学部 20 周年記念行事が集中した 2008 年度が過ぎて 1 年以内で、記録の刊行にたどりつけることができました。これも各位のご尽力のたまものと、御礼申し上げます。

一般的に、記念行事の中には、祝祭やイベントが単発的に行われることが往々にして見られますが、私たちは、祝祭だけでなく、学部の 5 年後、10 年後への出発という意味合いを込めました。これが、社会学部 20 周年記念事業の大きな特徴といえるでしょう。

もっとも、儀礼論としては、記念の祝祭は、進行中の社会集団が定期的に自己を確認する手段であり、原初に回帰するものです。ですから、祝祭には、原初志向のみならず、当然に、未来志向も含まれます。その意味では、学部の将来像を構想する試みも、ことさら特異なことではなく、祝祭の未来志向のモチーフを拡大し、具現化することにほかならないことになるでしょう。

では、原初にあたるのはなにか。

私たちは、現在の社会との取り組みから始めま

した。私たちが構想を試みる将来像の表象を、キーワードとして示したのが「社会的排除」です。社会的排除という言葉は、さまざまな局面を包含しますが、焦点は、もちろん、私たちが“難民”・難儀する人びとと表現しようとした排除されている人びとです。難儀の実態に迫り、その解消や支援の方途を探る必要があります。

もっとも、排除の因は、排除される側ではなく、排除する側に、また排除するシステムにあることはいうまでもないことです。さらに、排除を制度的手段からの締め出しとすれば、手段が指向する文化的目標も検討されるべきでしょう。

ここに収載したのは、未来志向の出発に当たる記念講演とシンポジウムです。そして、2009 年度、社会学部に共生社会研究センターを設立し、その事業を展開しています。その過程で、原初の今日の形象が確立することが期待されます。

20 周年記念行事、途半ば。

(2010 年 1 月 10 日記)